

青梅・羽村ピースメッセンジャー 2015

中学生広島派遣事業 レポート

～新しい友達との出会いと平和の大切さを心で感じる旅～



平成 28 年 2 月

青梅・羽村子ども体験塾

はじめに

2015 年は、終戦から 70 年にあたります。

日本は 70 年間、戦争のない平和な状態を保っていますが、世界へ目を向けるとテロや内戦が起きている国や地域があり、未だ、悲惨な戦争が続いています。

そこで、青梅市と羽村市は、戦争の悲惨さと平和の大切さを実体験として感じ取り、平和のために行動し、自ら発信できる若者を育成するため、平成 27 年 8 月 4 日から 6 日にかけて、ピースメッセンジャーとして中学生 25 人を原爆が投下された広島市へ派遣しました。

広島市では、動員学徒として軍の司令部で被爆した岡ヨシエさん、旧制広島県立第二中学校 23 期生の浅野温生さん・小畑彰三さん・国重昌弘さん・新出稔雄さん・山本定男さん・塚本昭さん・田淵廣和さん、広島県立広島第一高等女学校の 2 年生だった児童文学作家の大野允子さんにご協力いただき、被爆証言を聴き、対話を重ねるとともに、原爆ドーム、慰霊碑及び平和記念資料館等で原爆資料を見学した上で、平和記念式典に参列しました。これらの体験を通じ、中学生は、戦争の悲惨さと平和の大切さを心で感じ取り、現在の平和は過去の悲惨な戦争体験と戦後のつらい生活からの復興の上に成り立っていることを認識しました。

広島派遣を終えた中学生は、青梅市と羽村市で市民を交えたワークショップを開催し、広島市で体験してきたことを自分の言葉として話し、参加者全員で対話を重ねて戦争の悲惨さと平和の大切さを深めていき、「対話により平和を実現できる」との共通認識のもとでピースメッセージをまとめ、報告会等を通じて広く発信しました。

「平和ボケしている」これは被爆体験者の証言の一言です。私たちは、過去の悲惨な戦争体験を忘れず、日本が未来永劫平和であるとともに、全世界が平和な状態となるために、世界平和思想の趣旨普及に取り組んでまいります。

平成 28 年 1 月

青梅・羽村子ども体験塾実行委員会

— 目 次 —

1	青梅・羽村ピースメッセンジャーについて	1
	目的	1
	参加者	2
	中学生名簿	3
	リーダー名簿	4
	学習指導員名簿	4
	市職員名簿	4
	事業概要	5
2	活動内容	6
	ピースツアー	6
	事前研修	8
	1回目	8
	2回目	9
	出発式	11
	3回目	13
	広島派遣	17
	スケジュール	17
	1日目 平成27年8月4日(火)	18
	被爆証言 岡ヨシエさん	18
	慰霊碑等見学	21
	2日目 平成27年8月5日(水)	23
	広島平和記念資料館見学	23
	慰霊碑等見学	24

ピースワークショップ in 広島	26
被爆証言 広島二中 23 期生	31
広島県立第二中学校慰霊碑 お参り・献花	34
広島交響楽団 2015「平和の夕べ」コンサート	36
3 日目 平成 27 年 8 月 6 日 (木)	37
平和記念式典参列	37
慰霊碑等見学	39
被爆証言 大野允子さん	41
事後研修	45
ピースワークショップ	46
ピースワークショップ in 羽村	47
ピースワークショップ in 青梅	50
報告会 羽村市会場	54
報告会 青梅市会場	82
3 平和を願う作文	89

1 青梅・羽村ピースメッセンジャーについて

目的

世界平和は人類共通の願いです。終戦から 70 年が経過する現在の日本では、戦後生まれの人口が 8 割を占め、戦争体験者が減少していく中、若い世代が戦争や平和について学ぶ機会は、学校等での学習が中心であり、直接、戦争を体験した人から話を聞き、戦争の悲惨さと平和の大切さを心で感じ取る機会は少なくなっています。

そこで、青梅市と羽村市では、両市の中学生と一緒に広島市へ派遣して、原爆に関する様々な体験をし、戦争の悲惨さと平和の大切さを心で感じ取った上で、世界平和思想の趣旨普及のため、中学生である自分たちにできることは何かを考える機会とするとともに、自ら行動し、発信できる人として成長することを目的に、ピースツアー、ピースワークショップ、報告会で構成する「青梅・羽村ピースメッセンジャー」事業を実施しました。

参加者



中学生 25人 (青梅市 13人、羽村市 12人)

リーダー 5人

学習指導員 2人 (中学校教員 青梅市 1人、羽村市 1人)

市職員 3人 (青梅市 1人、羽村市 2人)

合計 35人

中学生名簿

青梅市			羽村市		
氏名	学校名	学年	氏名	学校名	学年
まつもと ともき 松本 智稀	第一中学校	2	しばた ひろき 柴田 紘希	羽村第一中学校	2
わたなべ ゆいこ 渡邊 結子	第二中学校	1	はらしま たくと 原島 拓登	羽村第一中学校	2
さかい たかゆき 酒井 高行	第三中学校	2	きくち らん 菊池 らん	羽村第一中学校	3
かんべ はるか 神戸 遥	第三中学校	3	まえだ さつき 前田 彩月	羽村第一中学校	3
なるみや ともき 成宮 友基	西中学校	2	いずみ ゆめ 出水 夢	羽村第二中学校	3
こみね しーな 小峰 詩菜	第六中学校	3	かんの あやな 菅野 純那	羽村第二中学校	3
てづか みつき 手塚 光希	第七中学校	2	すずき こたろう 鈴木 虎太郎	羽村第二中学校	3
なかむら ゆいか 中村 結夏	第七中学校	3	はなや もえ 花谷 望絵	羽村第二中学校	3
もとはし ゆりえ 本橋 ゆりえ	霞台中学校	2	みかわ りんのすけ 三河 凜之介	羽村第三中学校	2
こぐれ あいり 小暮 愛理	吹上中学校	3	くにえだ ゆい 国枝 優生	羽村第三中学校	3
おぎまき ななこ 尾崎 菜々子	新町中学校	3	さいとう わかな 斎藤 若奈	羽村第三中学校	3
ひろせ みなぎ 廣瀬 海凧	泉中学校	2	さとう ちさな 佐藤 千沙奈	羽村第三中学校	3
みねむら やすし 峯邑 康志	泉中学校	3			

リーダー名簿

氏名	所属
くすみ まちこ 楠見 真智子	明治大学
きとう しょうた 佐藤 翔大	社会人
つかもと りき 塚本 理樹	駿河台大学
みうら あやね 三浦 絢音	杏林大学
やまもと ゆうき 山本 雄貴	杏林大学

学習指導員名簿

氏名	所属
ふくだ けいいち 福田 恵一	羽村市立羽村第一中学校教員
みずた しょうこ 水田 祥子	青梅市立第一中学校教員

市職員名簿

氏名	所属
あさうみ たくや 浅海 拓哉	青梅市企画部秘書広報課主任
たかおか ひろみつ 高岡 弘光	羽村市企画総務部企画政策課主査
たかやま まよ 高山 真代	羽村市企画総務部広報広聴課主事

事業概要

青梅・羽村ピースメッセンジャー ピースツアー

事前研修：3回

- ・グループワーク
- ・メッセージボード作成（抱負）
- ・出発式
- ・保護者説明会



広島派遣：3日間

- ・被爆体験者証言
- ・ピースワークショップ in 広島
- ・平和記念資料館等見学
- ・平和記念式典参列
- ・振り返り



事後研修：1回

- ・振り返り
- ・報告会準備

ピースワークショップ

- ・ピースワークショップ in 羽村
- ・ピースワークショップ in 青梅

ワールドカフェ方式

「平和のために私たちがやれること」をテーマに、対話を重ねピースメッセージをまとめました。

報告会

- ・羽村市会場
- ・青梅市会場

プレゼンテーション、作文の朗読により、事業報告を行い、ピースメッセージを発信し、世界平和思想の趣旨普及に取り組みました。

2 活動内容

ピースツアー



- 事前研修 3回 7月22日(水)・26日(日)・29日(水)
・出発式 7月29日(水)
- 広島派遣 3日間 8月4日(火)～6日(木)
- 事後研修 1回 8月9日(日)

ピースツアーは、「事前研修」「広島派遣」「事後研修」で構成しています。

●事前研修

青梅・羽村ピースメッセンジャーに参加する35人が仲良くなり、何でも言えて聞くことができる友達になるよう、毎回、全員でチェックインとリフレクションを繰り返し、今の気持ちと振り返りを自分の言葉で話す機会を作るとともに、グループワークを中心に、太平洋戦争のこと、広島に投下された原爆のことを学んだ上で、被爆体験者の方への質問事項や平和記念公園等でのグループ活動について話し合いました。

●広島派遣

グループ活動を基本とし、被爆体験者の方から証言を聞き・対話した上で、原爆資料を見学することで戦争の悲惨さと平和の大切さを心で感じとり、更に、平和記念式典に参列することで深めていきました。

●事後研修

広島派遣での体験や感じたことを振り返り、自分達の言葉で広く発信するため、報告会でのプレゼンテーションの準備に取り組みました。



事前研修

1回目 平成27年7月22日(水) 19:00~21:00

羽村市生涯学習センターゆとろぎ



事業に参加する35人が初めて顔を合わせたので、リラックスできるよう、まず、チェックインとして「自己紹介と最近あったうれしかったこと」を、一人ひとり話した後、アイスブレイクを取り入れて、楽しみながら打ち解けていきました。

広島市ではグループ活動が基本となるため、リーダー1人と中学生5人で構成するグループを作った上で、太平洋戦争や広島に投下された原爆などについて学習しました。

2回目 平成 27 年 7 月 26 日 (日) 9 : 00 ~ 14 : 00

青梅市役所



2回目の顔合わせでまだ固さの残るため、打ち解けられるようチェックインとして、「家族と話したピースメッセンジャーに関すること」を一人ひとり話した後、研修会を開始しました。

1回目に引き続き、太平洋戦争について学習した上で、広島市でのグループ活動の一環として取り組む広島平和記念公園内の慰霊碑等の見学ルートと、被爆体験者の方への質問事項についてグループごとに話し合い決定しました。

見学を予定している、広島市平和記念資料館に展示されている「滋くんの弁当」に関する絵本「まっ黒なおべんとう」を学習指導員が朗読し、傾聴しました。

広島市で交流する、旧制広島県立第二中学校（以下「広島二中」）23期生の方より提供していただいた、「レクイエム『碑』」を傾聴しました。



レクイエム「碑」

作詞：薄田純一郎、作曲：森脇憲三、初演指揮者：山本定男、初演合唱団：広島メンネルコール
旧制広島二中出身者3人（作詞・作曲・初演指揮者）により作り上げられた、原爆で亡くなった
広島二中1年生322人の鎮魂と、世界平和への熱い祈りが込められた曲

（広島メンネルコールWebサイトより抜粋）

出発式 平成 27 年 7 月 29 日 (水) 19 : 00~20 : 00

羽村市コミュニティセンター



青梅市長、羽村市長及び保護者等に対して、事業に参加する 35 人が、広島市で学びたいこと、体験したいこと、広島市での体験に期待すること、自分の意識がどのように変化するかなど、一人ひとり抱負を述べた上で、両市の市長、副市長から激励を受けました。



3回目 平成 27 年 7 月 29 日 (水) 20 : 00~21 : 00

羽村市コミュニティセンター



広島市での行程について最終確認を行い、リーダーと中学生が、広島市での体験を前に、それぞれの抱負を書いたメッセージボードを作成しました。

最後に、レクイエム「碑」を傾聴し、広島市へ出発する機運を高めていきました。

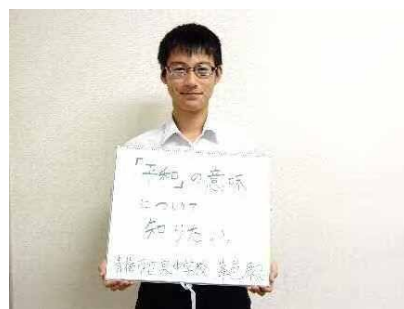
グループ名：広島で考える



青梅新町中 3年
尾崎 菜々子



青梅泉中 2年
廣瀬 海凼



青梅泉中 3年
峯邑 康志



羽村一中 3年
前田 彩月



羽村三中 2年
三河 凜之介



リーダー
山本 雄貴

グループ名：就活ingとPM



青梅西中 2年
成宮 友基



青梅七中 2年
手塚 光希



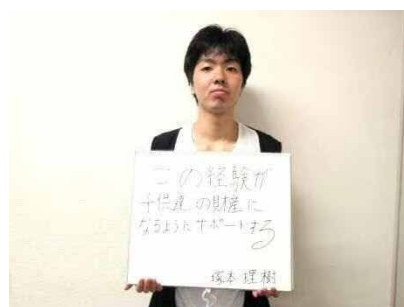
青梅吹上中 3年
小暮 愛理



羽村二中 3年
鈴木 虎太郎



羽村三中 3年
佐藤 千沙奈



リーダー
塚本 理樹

グループ名 : Peace Girls



青梅三中 3年
神戸 遥



青梅六中 3年
小峰 詩菜



羽村一中 3年
菊池 らん



羽村二中 3年
出水 夢



羽村三中 3年
国枝 優生



リーダー
三浦 絢音

グループ名 : Peace レンジャー



青梅三中 2年
酒井 高行



青梅霞台中 2年
本橋 ゆりえ



羽村一中 2年
原島 拓登



羽村二中 3年
花谷 望絵



羽村三中 3年
斎藤 若奈



リーダー
佐藤 翔大

グループ名 : Colorful Peacer



青梅一中 2年
松本 智希



青梅二中 1年
渡邊 結子



青梅七中 3年
中村 結夏



羽村一中 2年
柴田 紘希



羽村二中 3年
菅野 純那



リーダー
楠見 真智子

広島派遣 8月4日(火)～6日(木)

スケジュール

8月4日(火)		8月5日(水)		8月6日(木)	
5:00	青梅市役所集合 (青梅市中学生)	6:30	起床	5:30	起床
5:10	青梅市役所出発 (バス)	7:30	朝食	6:00	朝食
5:20	羽村市役所集合 (羽村市中学生)	8:30	平和記念資料館見学	8:00	平和記念式典参列
5:30	羽村市役所出発 (バス)	11:15	原爆ドーム前集合	9:00	慰霊碑等見学 被爆証言(大野さん)
8:13	東京駅出発 (のぞみ 155号)	11:30	広島市青少年センター	11:00	昼食
12:14	広島駅到着	12:00	ピースワークショップ	12:20	自由時間 ※おみやげ購入
13:00	被爆証言(岡さん)	14:30	被爆証言 (広島二中 23期生)	13:20	集合
15:00	慰霊碑等見学	15:30	広島二中慰霊碑 見学・献花	13:52	広島駅出発 (のぞみ 132号)
18:00	夕食・全体ミーティング	17:30	夕食・全体ミーティング	17:53	東京駅到着
19:30	班ミーティング	18:45	平和のタベコンサート	18:30	東京駅出発 (バス)
22:00	消灯	22:00	消灯	20:00	羽村市役所到着 (羽村市中学生)
				20:30	青梅市役所到着 (青梅市中学生)

1日目 平成27年8月4日(火)

被爆証言 岡ヨシエさん(中国軍管区司令部跡)



広島派遣1日目、早朝に青梅市・羽村市を出発し、東京駅から新幹線で広島市へ移動して、まず、広島市中央公園内にある、中国軍管区司令部跡の旧防空作戦室(半地下)で、動員学徒として14歳の時に被爆した岡ヨシエさんから、原爆が投下された直後の証言を聞きました。



岡さんは、中国地方の軍の司令部である、中国軍管区司令部（防空作戦室）で、発令された警戒警報や空襲警報等を交換機で各所へ連絡する業務を担当していました。

原爆が投下された前日の8月5日の夜は、B29が頻繁に飛来し、警戒警報・空襲警報を出すも、通り過ぎるだけで、広島には被害はなかったそうですが、今治や宇部など、各地の空襲と被害の情報が入ってきて、大変忙しかったそうです。

8月6日、朝食をとるため一度宿舍へ帰り、朝食を済ませて戻ってくる時に空を見上げると、雲一つない真っ青な空だったそうです。

業務へ戻ると、3機のB29が、広島県東方向の福山に侵入したとの情報が入るも、警戒警報を発令する指示がなく焦っていると、広島侵入と警戒警報発令の指示が出て、交換機で

警報を発令したと同時に、広島市内とは反対方向にある窓から、キラキラと白い光が入ってきて、事故だと思ったとたんに強い衝撃を受けて意識を失ったそうです。

意識が戻り、なんとか外へ出て広島市内を見渡すと、全てが瓦礫と化し、全滅してしまったと思ったそうです。司令部へ戻る途中に、倒れている兵隊から「新型爆弾にやられた」と聞き、そのことを指令部の電話から、たまたま繋がった福山の兵隊に「新型爆弾により広島が全滅した」と伝えたそうです。

その後、大火災となり、友達と避難する途中で火に囲まれてしまい、逃げ場がなくなった時に大粒の黒い雨が降り、火が消えて、神様が助けてくれたと思ったそうですが、後に、黒い雨は、放射能を含んだ死の雨だと知ったそうです。

証言の最後に、「今の平和は、ただ平和になったのではない。大きな犠牲、若い優秀な人達の犠牲の上にある。戦争ほど悲惨なものはない。二度と戦争を起こしてはいけない。平和を守ってほしい」と、未来を担う中学生に向けてメッセージをいただきました。



慰霊碑等見学（平和記念公園）



事前研修の中で、グループごとに意味等を調べた平和記念公園内の慰霊碑等を見学しました。

各グループの主な見学先は、次のとおりです。

●Colorful Peacer

相生橋、原爆ドーム、動員学徒慰霊塔、被爆した墓石、原爆供養塔

●Peace レンジャー

原爆死没者碑、被爆したアオギリ、嵐の中の母子像、広島県立第二中学校原爆慰霊碑

●就活 ing と PM

原爆死没者慰霊碑、平和の池、平和の灯、原爆供養塔、平和の石燈、被爆した墓石

●広島で考える

平和の泉、原爆の子の像、レストハウス、平和の灯、旧天神町北組慰霊碑、峠三吉詩碑、
被爆したアオギリ、嵐の中の母子像

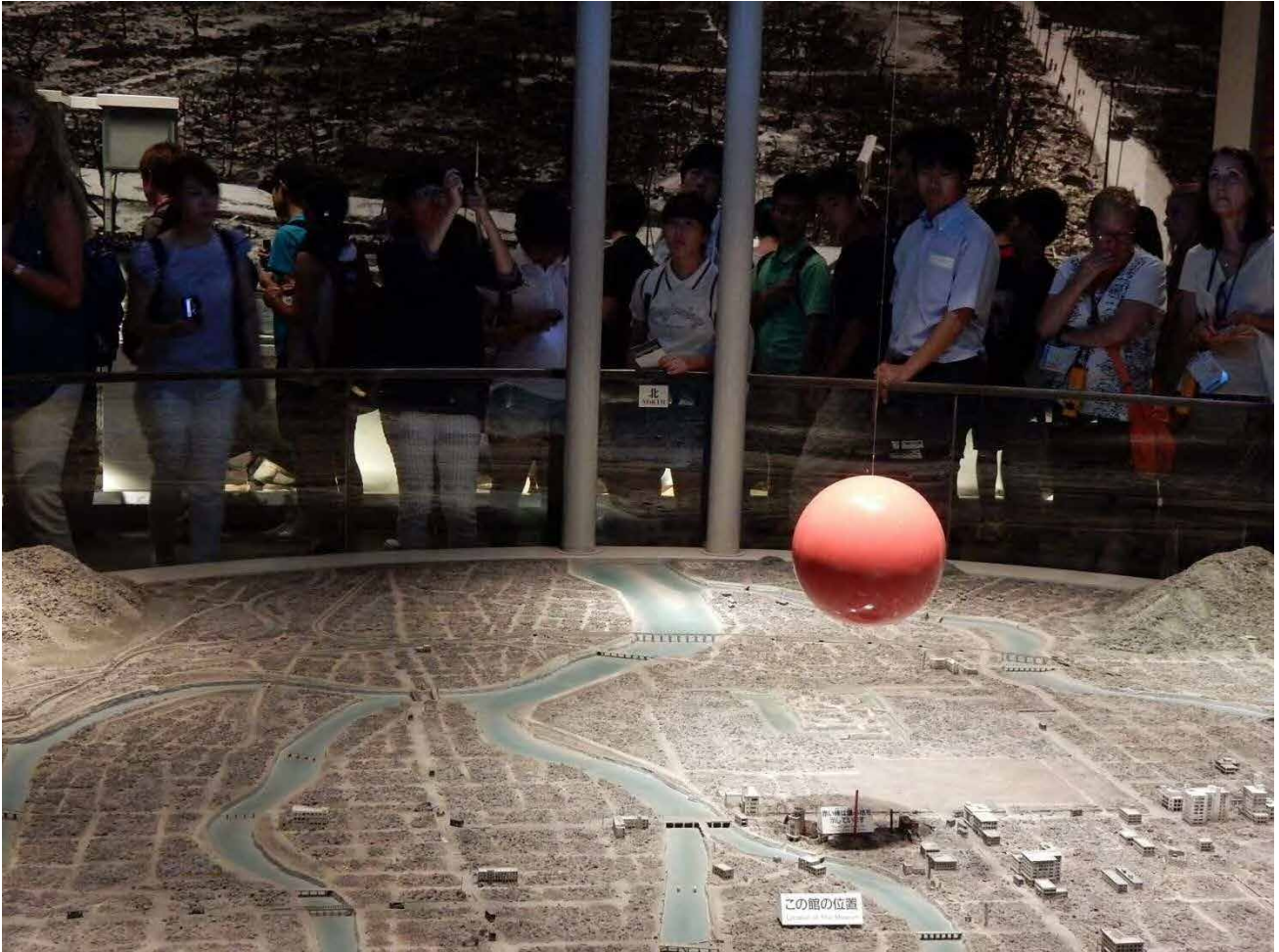
●Peace Girls

原爆死没者慰霊碑、被爆した墓石、相生橋、嵐の中の母子像



2日目 平成27年8月5日(水)

広島平和記念資料館見学



広島派遣2日目、まず、広島平和記念資料館を見学しました。

リニューアル工事と重なってしまい、東館は見学することができませんでしたが、本館に展示されている、原子爆弾の仕組み、遺品類、伸ちゃんの三輪車、滋くんの弁当、熱線による人的被害、中学生の学生服などの展示を見学することができました。

世界スカウトジャンボリー参加者の見学と重なり、大変混雑する中、中学生は気になった展示品を写真に撮ったりメモしたりしながら熱心に見学しました。

慰霊碑等見学（平和記念公園）



平和記念資料館見学後、ピースワークショップまでの間に、平和記念公園等にある慰霊碑等を見学しました。Peace レンジャーは、1 日目の夜のミーティングで、大勢の外国人が、なぜ広島市に来ているのか確認するため、アンケートにチャレンジしました。

各グループの主な見学先は、次のとおりです。

●Colorful Peacer

原爆死没者慰霊碑、平和の灯、原爆犠牲ヒロシマの碑、峠三吉詩碑

●Peace レンジャー

外国人へのアンケート

●就活 ing と PM

被爆したアオギリ、峠三吉詩碑、旧天神町北組慰霊碑、レストハウス、動員学徒慰霊塔

●広島で考える

原爆死没者慰霊碑、被爆した墓石、相生橋、原爆ドーム

●Peace Girls

峠三吉詩碑、旧天神町北組慰霊碑、レストハウス、原爆ドーム、爆心地



ピースワークショップ in 広島（広島市青少年センター）（参加者 60 人）

～平和のために自分たちにできること～



広島二中 23 期生の浅野温生さん・小畑彰三さん・国重昌弘さん・新出稔雄さん・山本定男さん・塚本昭さん・田淵廣和さんにご協力いただき、青梅市・羽村市のリーダーと中学生に加え、広島市の中学生等 20 人が参加し、合計 60 人でワールドカフェ方式による「ピースワークショップ in 広島」を、広島市青少年センターで開催しました。

ワールドカフェの心得として、「耳を澄ませて聞く」「恥ずかしがらず心に浮かんだことを話す」「どんな意見も否定せず受け入れる」ことをルールとしたことで、リラックスした雰囲気の中、安心して本音を話すことができました。

ピースワークショップでは、7つのグループに分かれて対話を重ねていきます。まず、リラックスするために、チェックインとして、自己紹介や今の気持ちをそれぞれが話し、対話の準備をしました。

リラックスしたところで、テーマの「平和のために自分たちにできること」を考えるため、まず初めに、広島二中 23 期生の 7 人の方から、原爆が投下された当時、どこで、どの様に過ごしていたのか。どのように被爆したのか。原爆投下後の行動や街の悲惨な状況など、中学生の時の体験や気持ちなどを話していただきました。

参加者は、真剣に聞き入り、ポイントや気になる点などを、テーブルに敷いたクラフトペーパーにメモしていきました。



次に、「話を聴いて感じたことは？」をテーマとし、グループごとに対話を重ねていき、それぞれが思った事、感じた事などを、グループ内で共有しました。

席替えをしてメンバーを入れ替え、次に、「平和のために私がやりたい事、やれる事は？」をテーマとして対話をしていきます。それぞれのテーブルで聞いたり話したりした内容を発表した上で、新しいメンバーで対話を重ねることで、考えを混ぜ合わせていながら、平和のために自分に何ができるのか、それぞれが用紙に記入し、グループ内で共有しました。



参加者が考え、感じた「平和のためにやりたい事、できる事」は、次のとおりです。

- 一人ひとりの人間を大切に想い、もし、何かあった時には助け合う事。
- 争いの醜さ、戦争の恐ろしさを、身近な人に伝えていく。また、日常の中で譲り合いの心を持つ。
- 平和な今に慣れすぎない。
- 身近な戦争（いじめなど）を止めていく。無くしていく。
- 今回聞いた話をたくさんの人に伝え、戦争の恐ろしさ、そして、戦争の無い今の時代がどんなに平和であるか、改めて考える。みんなにも考えてもらう。
- たくさんの人とコミュニケーションをとる。今を大切に過ごす。戦争についてもっと知る。
- 今、自分が普通に生きていられることに感謝する。平和について考え、そのために自分ができること、小さいことから始める。思いやり、感謝、優しさ など。
- お互いの意見を語り、尊重して、自分の考えと比べて、どう違ってなぜ違うのかを考え、ギャップをきちんと扱っていけるようになる。
- 身近にいる人からでいいから、戦争について知ったこと、感じたことを話していきたい。
- 日本が戦争で失ったもの、経験を知る事が大切だと思った。知って、伝える。日本中の人々が今日の話を知れば戦争は二度としないと。学校へ帰ってから、しっかり発表していきたい。

●被爆の実体験を、広く内外に伝えていくこと。日本のことばかりでなく、世界で起こっている悲劇をしっかりと勉強すること。

●自分を大切に、人のためにつくす心を。

など

最後に、各グループの代表者が発表し、全体で共有しました。



被爆証言 広島二中 23 期生（広島市青少年センター）



ピースワークショップに引き続き、広島二中 23 期生の小畑彰三さん・国重昌弘さん・新出稔雄さん・塚本昭さん・田淵廣和さんにご協力をいただき、青梅市・羽村市のリーダーと中学生に、被爆証言を話していただきました。

ピースワークショップより詳しく、資料などを使いながら当時の様子を丁寧に話していただきました。

メモを取ったり質問をしたりしながら、熱心に聞き入り、心で感じ取っていきました。

話を聞いた中学生の感想は、次のとおりです。

●原爆が投下された時、広島駅の近くの東錬兵場に草取りのために集合していました。1年生は、爆心に近い本川の近くに集合していたため、全滅してしまいました。戦時中の中学生の生活は、今とは全く違うもので、学校では、柔道や剣道などの武道を習い、英語の授業も一応あったそうですが、敵国の言葉とされ、しっかり学ぶことはできませんでした。勤労奉仕が始まると、食糧不足改善のために農作業をしたり、空襲を受けた時に燃え広がるのを防ぐために、家を壊して空地をつくる建物疎開をしたりするようになり、勉強をしたくてもできなくなっていました。やること全てが戦争につながっていたようで、戦争のために働いて、勉強もできず、将来の夢も奪われていました。

●爆心地から2キロメートルの東錬兵場で農作業をする予定でした。集合時間は8時10分。250人位の2年生が集まっていました。空を見上げると、B29が飛んできました。その時は、空襲警報はありませんでした。「また来たか」と、いつもの事のように考えていましたが、観測機についている落下傘が落ちていくのを見て、疑問に思ったそうです。原爆投下直後、爆心地から比較的遠い場所にもかかわらず、爆風によって吹き飛ばされました。落ちてくるのが見えて、すぐに爆発したそうです。「一瞬だった」と言っていました。

●原爆投下の当日、お母さんに用を頼まれて、学校を休み、江田島のおじいさんの家に行く船に乗っていました。爆発を見た後すぐに江田島から船で戻り、農作業をする予定だった友人を探しながら広島市内の様子を見に行きました。友人を探す中、倒れた電車の中で椅子に座ったまま焼け死んでいた人。「熱い。助けて」という声を何度も聞いたそうです。

結局、その時には広島二中の友人を見つけることはできず、お母さんのことが心配になり、家に帰ることにしました。やっとの思いで家に帰りつき、お母さんの無事が確認できたときは、ホッとしたそうです。家族の存在の大きさはいつの時代も一緒だと思いました。

- 「戦後の日本」の事を話してくれました。中でも印象に残ったのは「日本の変化」についての話でした。戦時中の教育は、日本中心でアメリカの印象も敵国など、あまり良いものではなかったそうです。しかし、戦後、軍歌以外の音楽を教わり、世界にはこんなに素晴らしい音楽があるのかと、印象が大きく変わったそうです。「みんなで平和を守っていくことが大切だと思う。相手の事、それぞれの文化などを知る事で、平和が保たれていく」と言っていました。 など



広島県立第二中学校慰霊碑 お参り・献花



ピースワークショップ、被爆証言と、広島二中 23 期生の方にご協力をいただき、貴重なお話を聞かせていただきました。話の中で、当時、一つ学年が下の 1 年生は、建物疎開作業のために爆心地に近い本川の土手に集合していたため、原爆でほとんどの方が即死し、最終的に全員が亡くなってしまったことを聞きました。

戦災と原爆で亡くなった広島二中の職員・生徒 352 人を慰霊するために建てられた「広島県立第二中学校慰霊碑」に、お参りと献花をさせていただきました。

慰霊碑の裏には、亡くなられた 352 人の方の名前が刻まれています。



広島交響楽団 2015「平和の夕べ」コンサート (広島文化学園 HBG ホール)

広島交響楽団
2015「平和の夕べ」コンサート
Music for Peace ~世界に平和を!
現代最高のピアニスト
マルタ・アルゲリッチと
秋山和慶・広島交響楽団が
ヒロシマに捧げる
被爆70年に万感の想いを込めた
平和へのメッセージ

70th HIROSHIMA 2015
No Resulting of Peace Concert

HIROSHIMA SYMPHONY ORCHESTRA

Program
ベートーヴェン 劇音楽「エグモント」Op.84~序曲
Beethoven: "Egmont" Op.84: Overture
ベートーヴェン ピアノ協奏曲第1番 ハ長調 Op.15
Beethoven: Piano Concerto No.1 in C major Op.15
 Hindemith: Symphony "Die Harmonie der Welt"

指揮: 秋山和慶
Kazuyoshi Akiyama

2015.8.5 [水] 18:45開演 (17:45開場)
広島文化学園 HBGホール
Wednesday August 5, 2015 18:45 (17:45)
Hiroshima Bunka Gakuin HBG Hall

◆チケット料金(税込・全席指定)
S:5,500円(学生1,700円) A:5,500円 B:4,500円(学生1,500円)
◆チケット発売日
広島県民先行発売 5月25日(月)
一般発売 オンライン 2015年6月1日(日)、広島県民 2015年6月8日(月)
◆チケットお問い合わせ
JMSアスターホールや情報交流プラザ エディオ広島本店、広島広島駅前店チケットサロン、
広島文化学園HBGホール、アステール広島多目的ホール、広島文化学園、中野町駅前店、広島駅前店、
中国府駅前店(取り寄せ)、広島駅前店、チケットA(17歳以下)281-0001、チケットB(17歳以下)664101

主催/協賛: 広島県立広島文化学園
広島文化学園HBGホール
広島県立広島文化学園
広島文化学園HBGホール
広島県立広島文化学園
広島文化学園HBGホール
広島県立広島文化学園
広島文化学園HBGホール

お問い合わせ: 広島事務局 TEL: 985-532-3080
E-mail: info@hokyo.or.jp http://hokyo.or.jp

Martha Argerich A Tribute to Hiroshima

Dear Friends,

I am happy and honored to play with Hiroshima Symphony Orchestra and Maestro Kazuyoshi Akiyama for commemorating the 70th anniversary of A bomb attack to Hiroshima.

I have been playing in Japan under the concept of Music Against Crime, which is the strong belief that the love that music holds within will weaken people's desire to harm others.

I think the most horrible crime we witnessed during the World War II was A bomb attack in Hiroshima and Nagasaki and holocaust in Poland.

The crime of using nuclear weapons and the crime of using racism and ethnocentrism for solving disputes should never happen.

I believe Hiroshima will play more important roles to terminate such crimes in the future.

With Love,

Martha Argerich

Martha Argerich

親愛なる皆様
広島に被爆70周年を記念して、広島交響楽団とマエストロ秋山和慶と共演できることをうれしく、が
「死生に思います。
私は Music Against Crime (ミュージック・アゲinst・クライム) というコンセプトのもと日本国内で
演奏を続けてまいりました。音楽には心を癒やす事を育み、人を傷つける気持ちを委ねさせる力が備わっ
ているという信念からです。
第二次世界大戦で私たちが目撃したことも恐ろしい犯罪は広島と長崎への原爆投下とポーランドを
襲ったホロコースト(ユダヤ人の大量殺戮)だと恐ろしいです。
争いごとの解決のために核兵器を使用する犯罪と人種差別とエスノセントリズム(自民族中心主義)を
利用した犯罪は二度と起ってはなりません。
私はこのような犯罪を減減させるために広島が今まで以上に重要な役割を果たすものと信じています。
愛をこめて
マルタ・アルゲリッチ

指揮: 秋山和慶 Kazuyoshi Akiyama Conductor
ピアニスト: マルタ・アルゲリッチ Martha Argerich Piano

広島交響楽団、初のアステールホール公演! 「平和の夕べ」
8月1日(火) 19:00開演 (18:30開場)
上記同一内容にて開催、被爆70年にヒロシマの心を届けます。
入場料 (税込・全席指定) S:15,000円 A:13,000円 B:11,000円 C:8,000円
◆広島事務局でもチケットを販売いたしますので、お求めの方はお早め!

広島文化学園 HBG ホールで開催された、広島交響楽団「2015『平和の夕べ』コンサート」に参加しました。

このコンサートは、「被爆の実相を風化せず、『ヒロシマの心』を伝え、平和への思いを共有するための催し」と、広島市長のあいさつにあるとおり、音楽を通じた世界平和へのメッセージを感じ、現代最高のピアニスト「マルタ・アルゲリッチ」の演奏など、一流の演奏に聴き入りました。

3日目 平成 27 年 8 月 6 日 (木)

平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）参列



8月6日(木)午前8時～8時45分に開催された、平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）に参列しました。

戦後70年であるため、国内外から大変多くの方が参列していました。

午前8時から式典が始まり、原爆の投下時刻である8時15分に、原爆や戦争で亡くなられた全ての方へ黙とうを捧げました。

黙とう後、平和宣言・平和への誓い・内閣総理大臣などからのあいさつ等がありました。

参列した中学生の感想は、次のとおりです。

- 平和記念公園で行われた平和記念式典に参列しました。式典では、広島市長の平和宣言や、内閣総理大臣のあいさつなどがありました。国際連合事務総長のあいさつでは、広島が受けたダメージや、被爆した方々について、真摯に考えてくださっていました。このメッセージから、被爆者への尊敬の意、広島への応援、核兵器廃絶に向けての決意を感じました。最も心に残ったのは、こども代表による「平和への誓い」です。小学6年生の二人が、戦争に向き合い、平和について考えている文章を朗読しました。この中に「私たちは、今まで受け継がれてきた命と平和への思いを受け止め、考え、自分たちにできることから、『小さな平和』を創ろうとしています」とあり、争いの怖さや醜さを考え、身近なところから良くしていこうという決意が伝わり、将来、大きな平和を創るきっかけになると感じました。

など



慰霊碑等見学（平和記念公園）



広島での活動の最後に、出発までの時間を活用して平和記念公園等の慰霊碑等を見学しました。

各グループの主な見学先は、次のとおりです。Peace レンジャーは、2 日目に引き続き外国人へのアンケートを行いました。Peace Girls は、広島第一県女原爆犠牲者追悼式に参列し、当時 2 年生だった、児童文学作家の大野允子さんから被爆証言を聴きました。

●Colorful Peacer

祈りの泉、嵐の中の母子像、旧本川小学校平和資料館

- Peace レンジャー

外国人へのアンケート

- 就活 ing と PM

ヒロシマの心を世界に 2015

- 広島で考える

ヒロシマの心を世界に 2015

- Peace Girls

広島第一県女原爆犠牲者追悼式参列、大野允子さん被爆証言



被爆証言 大野允子さん（広島第一県女原爆犠牲者追悼式）



爆心地から 600 メートルにあった広島県立広島第一高等女学校では、建物疎開作業に従事していた 1 年生 223 人を含む生徒 281 人と教職員 20 人の、計 301 人の尊い命が犠牲となりました。校舎も被害を受け、残った片方の門柱の隣に、1955 年、広島県立広島第一高等女学校職員生徒追憶碑が建てられました。

8 月 6 日、Peace Girls の 6 人は、広島第一県女原爆犠牲者追悼式に参列しました。現在の広島県立広島皆実高等学校の校長、生徒会長、そして当時 2 年生だった方の 3 人から追憶の言葉が送られました。



追悼式の後、当時2年生だった児童文学作家の大野允子さんから話を聴きました。

大野さんの話を聴いた中学生の感想は、次のとおりです。

- 大野さんは「ヒロシマ、遺された九冊の日記帳」という本を書いた方です。なぜ本を書いたのかというと、当時の女学校1年生が残した日記帳を見て、自分の命を何に使うのか考えたら、“書いて伝える”という答えが出てきたからだそうです。「書いたものは、日記帳のように残っているし、書くということは、生きているからできること。見たこと、聞いたことを一生懸命、色々な言葉で言いたい」と言っていました。

大野さんの本を読みました。日記帳を残した少女の事を感じることができ、文字の力はすごいと感じました。

「見えないものが見える。そんな文を書きたい」とも言っていました。文字で伝えることは、直接会って話して伝えることより難しいことだと思います。それを選んだ大野さんは、とてもすごい人だなと思いました。

- 原爆投下の日、たまたま 10 キロメートル離れた地点にいた大野さんは、友達がみんな亡くなる中、生き残りました。友達の母親から向けられる視線に、強い批判を感じて辛い思いをするとともに、大野さん自身にも、遠くから見ている事しかできなかったという後ろめたい気持ちがあったそうです。 など



事後研修 平成 27 年 8 月 9 日（日） 9 : 00～17 : 00 青梅市役所



事前研修で学んだことや、広島派遣で体験したことなどを通じて、戦争の悲惨さや平和の大切さについて感じ取ったことをそれぞれが振り返り、一人ひとり発表することで、全体での共有を図りました。

その上で、報告会でどのように発表するか、リーダーを中心にグループごとにまとめていき、発表で使う原稿の作成、写真の選定、発表の順番決め等、発表の準備に取り組みました。

発表の準備が整ったグループから、学習指導員のアドバイスを受け、リハーサルを行いました。

ピースワークショップ



青梅・羽村ピースメッセンジャー事業に参加した中学生が、ピースメッセンジャーとして戦争の悲惨さと平和の大切さを伝えていく取組の一環として、青梅市と羽村市の会場で、ワールドカフェ方式によるピースワークショップを開催しました。

広島市でのピースワークショップは、被爆体験者から原爆投下直後の様子や、体験者だからこそ感じている平和の尊さなどの話を聴き、対話することで深めていきました。

広島派遣後のピースワークショップでは、ピースメッセンジャーが、広島市で聞いたこと、体験したこと、感じたことなどを、それぞれ自分の言葉で青梅市と羽村市の市民に伝え、対話を重ねていき、ピースメッセージをまとめました。

ピースワークショップ in 羽村

平成 27 年 8 月 15 日（土） 13 : 30 ~ 15 : 30

羽村市生涯学習センターゆとろぎ （参加者 48 人）



8月15日（土）午後1時30分～3時30分に、羽村市生涯学習センターゆとろぎで開催した「ピースワークショップ in 羽村」には、ピースメッセンジャーと、羽村市と青梅市の市民等、計48人が集いました。

ピースメッセンジャーと参加者が7つのグループに分かれて、ピースメッセンジャーの体験談を聞いたうえで、「平和のために私たちにできること」をテーマに、全員で対話を重ねていきました。

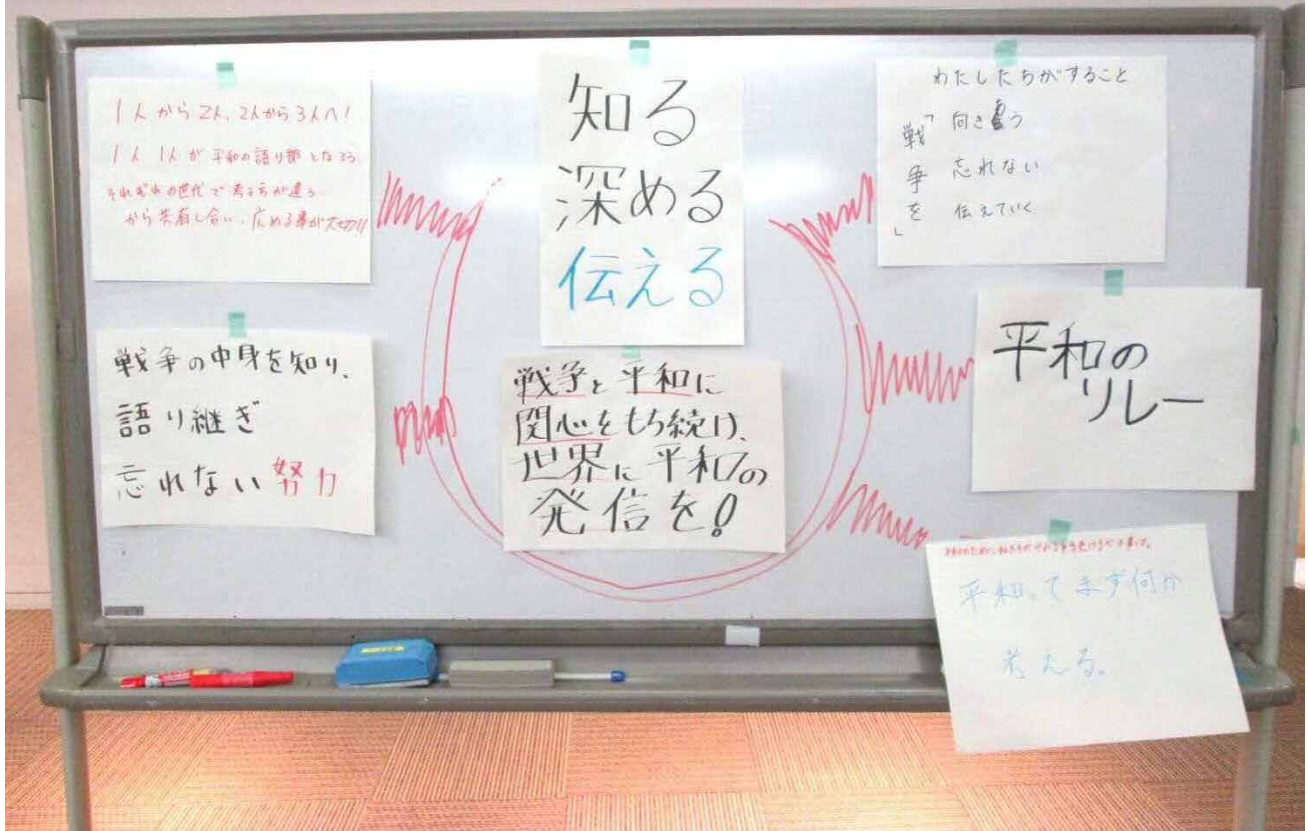
対話を通じて感じたことをグループ内で共有し、メッセージとしてまとめて、グループごとに発表して全体で共有しました。



7つのグループから挙げられたメッセージは、次のとおりです。

- 1人から2人、2人から3人へ！一人ひとりが平和の語り部となろう。それぞれの世代で考え方が違うから、共有し合い、広めることが大切!!
- 戦争の中身を知り、語り継ぎ、忘れない努力
- 知る・深める・伝える
- 戦争と平和に関心を持ち続け、世界に平和の発信を！
- 私たちがする事「戦争を」向きあう・忘れない・伝えていく
- 平和のリレー
- 平和ってまず何か考える

羽村市平和啓発事業 平和フォーラム
～平和の大切さについてみんなで考えよう



7グループのメッセージは関連性を持っていて、その中心となるメッセージを、ピースメッセージとしてまとめました。

知る・深める・伝える

～戦争と平和に関心を持ち続け世界に平和の発信を!～

ピースワークショップ in 青梅

平成 27 年 9 月 3 日 (木) 19 : 00 ~ 21 : 00

青梅市役所 (参加者 57 人)



9月3日(木)午後7時~9時に青梅市役所で開催した「ピースワークショップ in 青梅」には、ピースメッセンジャーと、青梅市と羽村市の市民等、計57人が集いました。



ピースワークショップ in 青梅では、これまでの「ピースワークショップ in 広島」と「ピースワークショップ in 羽村」で使用し、戦争体験を聴いて感じたことや平和について考えたことが書き込まれたクラフトペーパーを全員で見返した上で、参加者とピースメッセンジャーが12のグループに分かれて、ピースメッセンジャーの体験談を聞き、「これからも平和であり続けるために、私たちはどうすればいいか」をテーマに、全員で対話を重ねていきました。



対話を通じて感じたことなどをグループ内で共有し、最後に、平和であり続けるために感じたことを、それぞれが用紙に書き出し、グループ内で共有しました。

参加者が平和であり続けるために感じたことは、次のとおりです。

- 「戦争」「平和」について関心をもち、今以上の平和な未来をつくる
- 「平和」って何だろうと思った。それぞれで違うと思うけど、笑顔があることかなと思う
- 日本に落ちた原爆のことも、戦争のことも、日本が外国にしたことも、全て受けとめて伝えていかなくてはいけない
- 皆で話し合い深め合う事で、互いの考えを高め合えると思う。そんな「話し合う事」で平和は続いていくのかなと思う

- 無意識的な「平和ボケ」を変えることは難しい
 - 世界中に様々な価値観の人がいる中で、違う価値観の人のことを互いに理解し合うことが、
これからの平和を保っていくために必要なことだと思う
 - 平和の逆の状況を考え、私たちが暮らしている今がどれだけ平和なのかを感じていく
 - 戦争や平和について、自分の考えを持つ。周りに流されない心を持つ
 - 人を大切にする。暴力で解決しようとしてはいけない
 - 平和は当たり前ではない。今、生きていることは奇跡
 - 戦争や争いは、意見の違いから始まると思う。人間は全く同じ考えの人はいないから、全
てのことに答えを出していたら必ずどこかで食い違う。とても根気のいることだが、話し
合いをやめない。考え続ける。それが人間の強みだと思う。争って弱みにするのはもった
いないし、悲しい
 - 平和を続け広めていくために、まずは「知る」こと。そして「知ってもらおう」こと。さら
に「一緒に考える」ことが大切である
 - 青梅市と羽村市の中学生が、戦争について知りたいと思い行動していることが嬉しく、感
動した。過去（歴史）を学ぶこと、未来を想像することが平和につながると思う
 - 中学生の感性で受けとった被爆体験者の話を聴くのはとても新鮮な体験だった。平和はあ
たりまえにあるものではなく、努力して保ち、つくっていくもの。それを一緒に感じられ
たことがこの場の意味と思った
など
- 最後に、3人が代表して発表をし、全体で共有を図りました。

報告会 羽村市会場

平成 27 年 8 月 15 日（土） 16 : 00～17 : 00

羽村市生涯学習センターゆとろぎ （参加者 128 人）



8月15日（土）午後4時～5時に、羽村市生涯学習センターゆとろぎを会場として、ピースメッセンジャーが、青梅・羽村ピースメッセンジャー事業を通じて体験したことや感じたことを発表する報告会を開催しました。

報告会は、終戦記念日に羽村市が主催した「戦後70周年羽村市平和啓発事業 平和フォーラム」の中で実施し、会場には、青梅市と羽村市の市民128人が集い、中学生の発表に聴き入りました。

報告は、事後学習でグループごとに作成したスライドを活用し、最後に、「ピースワーク ショップ in 羽村」でまとめたピースメッセージを発表し、世界平和思想の趣旨普及に努めました。



(司会：国枝 優生（羽村三中3年）、峯邑 康志（青梅泉中3年）)

グループ「広島で考える」の発表

～8時15分広島の空は青かった～

尾崎 菜々子（青梅新町中3年）、峯邑 康志（青梅泉中3年）、廣瀬 海凧（青梅泉中2年）
前田 彩月（羽村一中3年）、三河 凜之介（羽村三中2年）、山本 雄貴（リーダー）



（岡ヨシエさん被爆体験談 中国軍管区司令部跡）

私たちは、岡さんから被爆体験談を聞きました。岡さんは、比治山高等女学校の生徒で学徒動員により、仲間50人と中国地方の軍司令部の地下通信室で働いていました。この地下通信室は、爆心地から約700メートルにあります。8月5日の夜から6日の

朝にかけて、B29 が広島市上空を通過し、周辺地域に空襲をしていましたが、広島市には空襲がなく、多くの方が「おかしい」と感じていたそうです。6日の朝方、B29 が1機、広島市上空を飛び、天気の様子などを確認していました。岡さんが朝食後、空を見上げたら真っ青だったそうです。その後、仕事場に戻りました。その時、また広島市に向かって B29 が3機飛んできました。そこで岡さんは、警戒警報を発令しようとした。



(原爆の模型 平和記念資料館)

ので殴られた感じがしたそうです。

岡さんは気を取り戻すと、部屋は霧がかかったようでした。地下通信室から出ようとすると、同級生の板村さんが居るのが見えました。岡さんは、地下通信室の裏にある堀の土手から広島街を見下ろすと、建物が全て瓦礫となり、シーンとしていました。まわりを



(岡ヨシエさん被爆体験談 中国軍管区司令部跡)

見回すと、近くに兵隊さんが倒れていて、「新型爆弾にやられた」と言うと、意識がなくな

ってしまいました。地下通信室に戻り、使える電話で、軍の他の司令部に連絡して「広島がやられました」と言うと、相手の兵隊さんは啞然として、状況を説明するよういわれので、倒れていた兵隊さんが言っていたのを思い出し「新型爆弾にやられました」と伝えた直後、ものすごい熱風と炎が地下通信室に入ってきました。「逃げます」と言って、外に出ると火に囲まれていて、岡さんと板村さんは、死を覚悟しました。その時、空から恵みの雨とばかりに黒い雨が降り、火が消え、黒い雨に感謝したそうです。その雨に有害な物質が入っていると知らずに。



(動員学徒慰霊塔 平和記念公園)

動員学徒という言葉を知っていますか。

岡さんは動員学徒で働いていましたが「もっと勉強したかった」と言っていました。原爆により、広島で働いていた大勢の子どもたちが亡くなりました。現在、そういった動員学徒にまつわる慰霊碑は平和記念公園内に

三つあります。その慰霊碑の一つひとつに、被害者や関係者、家族の方の悲しみ、怒り、そして、多くの方が亡くなった事を忘れないという思いが詰まっています。8月6日、慰霊碑の前にはたくさんのバナナが置いてありました。疑問に思い、係の人に聞いてみると、「当時の子どもは、あまりご飯が食べられずひもじい思いをしていたため、その当時、とても貴重だった果物を備えてあげようと思ったからです」と言っていました。

当時 15 歳の岡さんの日常、広島にいた方々の日常や大切な人が、一つの兵器により奪われました。二度とこのようなことが起こらないように、岡さんは戦争の悲惨さについて辛そうに語ってくれました。また、広島二中 23 期生の方々にも話を聞き、塚本さんは、時間が過ぎても一生懸命、最後まで色々話しをしてくださいました。私たちは話を聞いたうえで、広島二中原爆慰霊碑を見ました。慰霊碑は平和な時代に生まれてきた私たちに平和を伝えると同時に戦争の形も伝えるためのものだと思います。しかし、このことが理解できたのは、被爆者の経験を聞いたからこそ分かった事だと思います。被爆者が少なくなっている今、話を聞いた私たちの最低限の役割として、後世に、話しをしてくださった被爆者の方々の話を伝えていくことです。

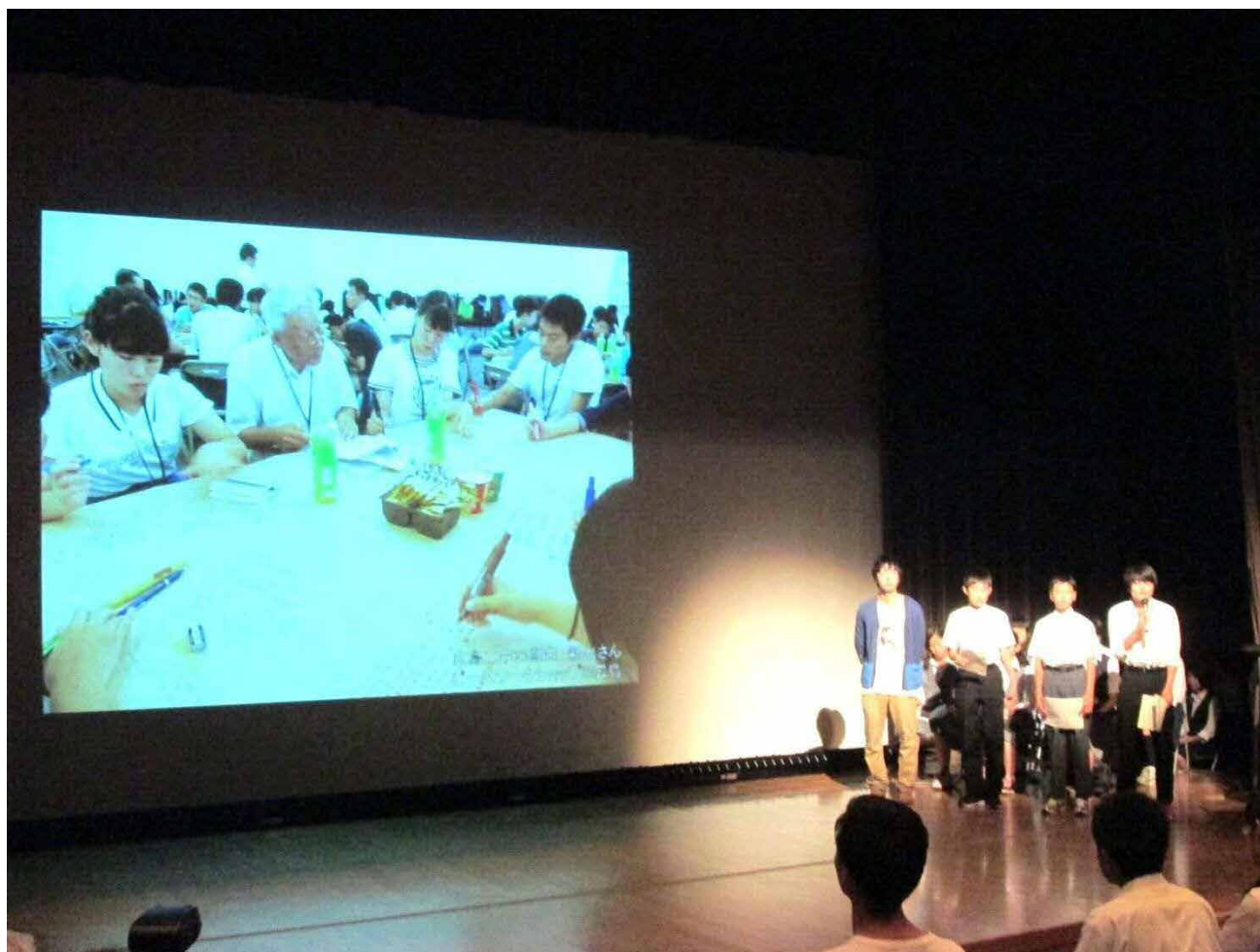


(広島県立第二中学校原爆慰霊碑)

グループ「就活 ing と PM」の発表

～その一瞬が忘れられない～

成宮 友基（青梅西中2年）、手塚 光希（青梅七中2年）、鈴木 虎太郎（羽村二中3年）
塚本 理樹（リーダー）



広島二中 23 期生で当時 2 年生だった方に話を聞きました。2 年生は、原爆が投下された時、広島駅の近くの東錬兵場に草取りのために集合していました。1 年生は、爆心に近い本川の近くに集合していたため、全滅しています。戦時中の中学生の生活は、今とは全く違うもので、学校では、柔道や剣道などの武道を習い、英語の授業も一応あったそうですが、敵国の言葉とされ、しっかり学ぶことはできませんでした。勤労奉仕が始まると、食糧不足改



(新出さん 広島二中 23 期生)

善のために農作業をしたり、空襲を受けた時に燃え広がるのを防ぐために、家を壊して空地をつくる建物疎開をしたりするようになり、勉強をしたくてもできなくなっていました。新出俊男さんは「やること全てが戦争につながっていた」と言っていました。戦争のために働いて、勉強もできず、将来の夢も奪われていったのです。

小畑彰三さんは、爆心地から2キロメートルの東錬兵場で、農作業をする予定でした。集合時間は8時10分。250人ぐらいの2年生が集まっていました。ふと空を見上げると、B29が飛んできました。ただ、その時に空襲警報はありませんでした。小畑さんたちは、「また来たか」と、いつもの事のように考えていましたが、観測機についている落下傘が落ちていくのを見て、疑問に思ったそうです。原爆投下直後、2年生の方々は、爆心地から比較的遠い場所にもかかわらず、爆風によって吹き飛ばされました。落ちてくるのが見えて、すぐに爆発したそうです。「一瞬だった」と言っていました。



(小畑さん 広島二中 23 期生)



(浅野さん 広島二中 23 期生)

浅野温生さんは、おじいさんが芋を作っていたため、食糧にそこまで困っていませんでした。原爆投下の当日、お母さんに「芋をもらってきて」と頼まれ、学校を休み、江田島のおじいさんの家に行く船に乗っていました。爆発を見た後す

ぐに江田島から船で戻り、農作業をする予定だった友人を探しながら広島市内の様子を見に行きました。友人を探す中、倒れた電車の中で椅子に座ったまま焼け死んでいた人。「熱い」「助けて」という声を何度も聞いたそうです。結局、その時には広島2中の友人を見つけることはできず、お母さんのことが心配になり、家に帰ることにしました。やっとの思いで家に帰りつき、お母さんの無事が確認できたときは、ホッとしたそうです。家族の存在の大きさはいつの時代も一緒だと思いました。

田淵廣和さんは、主に「戦後の日本」の事を話してくれました。中でも印象に残ったのは「日本の変化」についての話でした。戦時中の教育は、日本中心でアメリカの印象も敵国など、あまり良いものではなかったそうです。しかし、戦後、軍歌以外の音



(田淵さん 広島二中 23 期生)

楽を教わり、世界にはこんなに素晴らしい音楽があるのかと、印象が大きく変わったそうで

す。田渕さんは、「みんなで平和を守っていくことが大切だと思う。相手の事、それぞれの文化などを知る事で、平和が保たれていく」と言いました。ピースメッセンジャーとして平和を伝えていく活動の中、まず、「平和とは何か」を考える体験でした。



(広島県立第二中学校原爆慰霊碑)

小畑さんの友人に、当時1年生だった故
選浩行くんがいました。故選君は、全身大
ヤケドでしたが、自宅のお寺になんとかた
どり着き、お母さんに治療をしてもらいま
した。しかし、良い薬がある訳でもなく、
十分な治療はできませんでした。8月7日、

小畑さんがお見舞いに行った帰り際、故選くんは、とても大きな声で「さようなら」と言っ
たそうです。その2時間後に、亡くなりました。本川沿いに、広島二中原爆慰霊碑がありま
す。慰霊碑には、原爆によって亡くなった広島二中の生徒と先生方、352人の名前が刻まれ
ています。そこに、故選くんの名前もあります。1年生は原爆が落ちた時、この近くで作業
をしていたため、全員が亡くなったのです。

グループ「Peace Girls」の発表

～残された人々のそれぞれ～

神戸 遥（青梅三中3年）、小峰 詩菜（青梅六中3年）、菊池 らん（羽村一中3年）
出水 夢（羽村二中3年）、国枝 優生（羽村三中3年）、三浦 絢音（リーダー）



（広島第一高等女学校原爆犠牲者追悼式）

爆心地から 600 メートル離れた広島県立第一高等女学校も被害を受けました。教職員 20 人、学徒動員で建物疎開作業に従事していた 1 年生 223 人を含む生徒 281 人の、計 301 人の尊い命が犠牲となりました。爆心地から半径約 2000 メートルの地点は全壊、

全焼しました。爆心地から 600 メートルの地点にあった女学校も、残ったのは片方の門柱だけでした。その門柱の隣に、1955 年、広島第一県女原爆犠牲者追憶之碑が建てられました。

8 月 6 日、私たちは、慰霊式に参加しました。現在の広島県立広島皆実高等学校の校長、生徒会長、そして当時 2 年生だった方の 3 人の方から追憶の言葉が送られました。

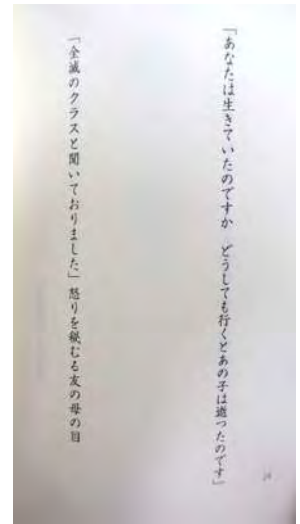


(大野允子さん)

慰霊式に参加していた大野さんにお話を聞きました。大野さんは「ヒロシマ、遺された九冊の日記帳」という本を書いた方です。なぜ本を書いたのかというと、当時の女学校 1 年生が残した日記帳を見て、自分の命を何に使うのか考えたら、“書いて伝える”

という答えが出てきたからだそうです。「書いたものは、日記帳のように残っているし、書くということは、生きているからできること。見たこと、聞いたことを一生懸命、色々な言葉で言いたい」と言っていました。大野さんの本を少しだけ読みました。それだけでも日記帳を残した少女の事を感じることができ、文字の力はすごいと感じました。「見えないものが見える。そんな文を書きたい」とも言っていました。文字で伝えることは、直接会って話して伝えることより難しいことだと思います。それを選んだ大野さんは、とてもすごい人だなと思いました。

大野さんには語られなかった過去がありました。大野さんの友人の梶山さんは、1年生の当時、盲腸炎のため学校を欠席し、クラスでただ一人被爆を免れました。しかし、風邪をひいていても学校へ行った同級生は、被爆して亡くなりました。「あなたは生きていたのですか どうしても行くとあの子は逝ったのです」「全滅のクラスと聞いておりました」怒りを秘むる友の母の目



(梶山雅子歌集ヒロシマ70年より)

この詩は梶山さんの書いた「ヒロシマ70年」という本のもので、大野さんも同じく、友だちの母親から向けられた視線が、強い批判を感じさせました。それは、大野さんが原爆



(梶山雅子歌集ヒロシマ70年より)

投下の日、たまたま10キロメートル離れた地点にいたため、友達はみんな亡くなったのに、自分だけが生き残ってしまったからです。大野さんは、その向けられている批判の目が辛いという思いと共に、大野さん自身にも、遠くから見ている事しかできなかつたという後ろめたい気持ちがあり、ずっと話すことができなかつたそうです。

私たちは、平和を呼びかける様々な活動をしている人に出会いました。まず、「サダコと折り鶴」の読み聞かせをしている3人の方に出会いました。「サダコと折り鶴」の主人公の佐々木禎子さんは、2歳の時に被爆し、リレーの選手に選ばれるようなとても元気な少女でしたが、12歳の時に、放射線の影響で白血病を発症しました。彼女は12歳で亡くなる直前まで、回復を願い、折り鶴を折っていたそうです。読み聞かせをしている人は、この事実が



(被爆したアオギリの資料)

あったということを伝えたいのだと思います。次に会ったのは、「被爆したアオギリ」の近くでアオギリを移植した時の事や、アオギリについての傷跡の事について話していた男性でした。私たちは男性から、この資料をもらいました。その中で一つ紹介したいものがあります。

このハガキは、この男性に向けて沼田さんという方が送ったものです。沼田さんは被爆をして片足を失い、自殺を考えていたそうです。その時、沼田さんは芽を出して

いるアオギリと出会い、生きる力をもらって自殺をやめたそうです。私は、このアオギリを見て、命の尊さを感じることができました。

最後に、広島県の中高生と出会いました。彼らは「核兵器禁止条約」の交渉を始めることを求める署名運動をしていました。核兵器を無くすために、私たちは署名をしました。

「一人ひとりの声は微力でも、集まれば世論を変えられるはずです」これは活動を行っていた中高生の言葉です。一人でも多くの人がこの言葉で平和について考えれば世界は変わると思います。



(ヒロシマ・中高生による署名活動)

私たちは、実際に被爆し、遺された方々が現在に至るまで行ってきた活動を直接知り、未来に伝えたいメッセージは何なのかを考えました。大野さんのように、小説という形で実際に起こったことを文字で残す方もいれば、直接、自分の被爆体験を人々に語り続けている方もいます。このような方々は、想像もできない様な辛い体験をしてきていて、思い出したくないこともたくさんあると思います。その様な中で、事実を伝え続けているのは、「忘れてほしくない」「風化させたくない」という想い。そして、何よりも「広島から目を逸らさないでほしい」という、強い想いがあるのだと思います。私たちは、そのような想いをつないで、絶対に戦争を繰り返さずに、平和を守り続けていくことを未来に伝えていきたいです。



(ピースワークショップ in 広島 参加者集合写)

グループ「Peace レンジャー」の発表

～世界から見た平和～

酒井 高行（青梅三中2年）、本橋 ゆりえ（青梅霞台中2年）、原島 拓登（羽村一中2年）
花谷 望絵（羽村二中3年）、斎藤 若奈（羽村三中3年）、佐藤 翔大（リーダー）



私たちは、広島での一日目の夜の班ミーティングで、たくさんの外国人が、平和記念公園の慰霊碑を見学していることが気になり、その方の気持ちを知りたいという思いから、二日目と三日目に、平和記念公園で外国人にインタビューをすることにしました。英語での質問になるので、メッセージボードを用意しました。最初は、とても緊張したけど、日本語を少し話せる方や、フランス人なのに英語が話せる方がいたり、もたついてしまうところもあり



(外国人へのアンケート)

ましたが、どんどん楽しくなり、笑顔とジェスチャーで乗り切ることができました。私たちは、インタビュー活動を通じて、積極性を身に付けることができました。それでは、その結果をまとめたものを発表します。

23 か国、71 人の方にインタビューを行いました。インタビューで私たちが感じた印象を発表します。まず、問1として、「Why did you come to HIROSHIMA? (なぜ広島に来たのですか?) 」と聞きました。私たちの予想では、“広島について学ぶため”が多いと思いました。結果は、“観光”が3人、“広島について学ぶため”が28人で、“その他”が40人と一番多かったです。

“その他”と答えた人は、ボイスカウトやJAICの研修生であり、色々な理由で広島に来ていました。



(外国人へのアンケート)

次に問2として、「How do you think about using atomic bomb? (原爆を使ったことについてどう考えますか) 」を聞きました。私たちの予想は、全員が“反対”と答えると思っていました。海外から広島にわざわざ来て、広島について学ぶなら、絶対反対すると思ったからです。しかし、“賛成”と“その他”と答えた人もいましたので、その理由を聞いてみ



(外国人へのアンケート)

ました。まず、“賛成”と答えた、アメリカ人の27歳男性の理由は、「戦争を早く終わらせるため」と、当時アメリカが原爆を落とした理由として発表したものと同じでしたが、「原爆によって平和が訪れた。しかし、二度

と使われないことを祈る」と言っていました。次に、“その他”と答えた、イギリス人の50歳の男性の理由は、「もし自分が戦前にいたら、きっと賛成しただろう。しかし、今の広島を訪ねてみて使ってはならないと思った」と言っていました。



(外国人へのアンケート)

次に問3として、「How do you think what we can do for peace? (平和のために私達に出来ることは何ですか)」を聞きました。答えは手帳に書いてもらいました。その中でも、「お互いを大切にすること」「対話

をすること」が特に印象に残りました。

ピースワークショップで、広島二中23期生の塚本さんに聞いた被爆体験談の中で、「兵器が無いことと、平和は同じじゃないんだよ」という言葉が心に残っています。この言葉について考えてみると、広島・長崎以降、核兵器が使われていないのは“対話”という手段で、

核兵器を使用しないという意味での平和を実現しているのだと思います。兵器があろうとなかろうと、人々の心がけ次第で、平和は実現するのです。そして、対話で、世界で起こる紛争や内戦を止められないはずはありません。世界中の人々が安心して暮らせるよう、対話によって戦争を起こさない意志を持ち続けること。そして、お互いの文化や考え方を知り、歩み寄ることが大切だと思います。私たちは、広島での活動を通じて身に付けた自信により、自分から積極的にコミュニケーションを取り、行動に移せる人でありたいと思います。



(平和記念公園)

グループ「Colorful Peacer」の発表

～70年後の今～

松本 智稀（青梅一中2年）、渡邊 結子（青梅二中1年）、中村 結夏（青梅七中3年）
柴田 紘希（羽村一中2年）、菅野 純那（羽村二中3年）、楠見 真智子（リーダー）



私たちは、広島で平和記念公園を見て回りました。まず、慰霊碑です。“噫（アア）”と書いてある旧天神町北組慰霊碑、「ちちをかえせ ははをかえせ としよりをかえせ どもをかえせ…」という詩が書い

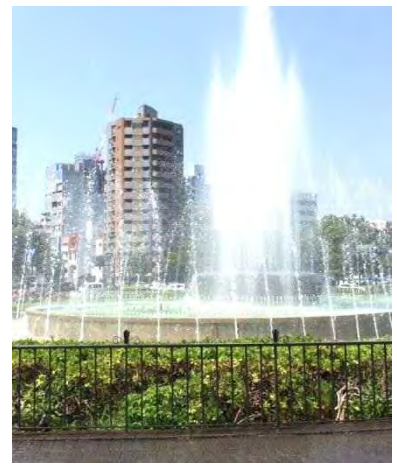


（峠三吉詩碑 平和記念公園）

である、峠三吉詩碑もありました。この詩の最後には、「へいわをかえせ」とあります。これは、家族・友だちが居たあのころの楽しさ、みんなで過ごしたあの日々をかえせと訴えているのではないかと思います。これらの碑の前には、いつもお花や水が供えられています。この水は、大やけどをして「水がほしい、水がほしい…」と言って、力尽きて亡くなった人々のためにあります。

平和記念公園には、水に関連するものがたくさんあります。

「平和の泉」、原爆死没者慰霊碑の後ろにある「平和の池」、平和記念資料館の前にある大きな「祈りの泉」。そして、公園の周りにある川。この川には柵が付いていません。こういったものは、水を求めながら亡くなった方のためだと思います。



(祈りの泉 平和記念公園)

平和記念資料館に展示されている遺留品はボロボロで、何か、誰の物か分からない物がたくさんありました。一方、8時15分で止まった懐中時計など、きれいに残っているものもありました。また、原爆直後の写真や、火傷した人の写真もありました。その中で一番印象



(滋くんの弁当箱 平和記念資料館)

に残ったのは、「滋くんのお弁当箱」です。お弁当箱には、初めて収穫した大豆が入っていて、滋くんは喜んで持って行ったそうです。しかし、滋くんはお弁当を食べる前に亡くな

ってしまいました。あんなにうれしそうに持って行ったお弁当を食べられなくて悲しむお母さんのシゲ子さんの気持ちがよく伝わりました。私たちは、本やテレビ等の情報しか知りませんでした。でも、遺留品や写真を見て、戦争の本当の恐ろしさを知り、戦争をしてはいけないという気持ちが高まりました。



(本川小学校平和資料館)

吹き飛ばされたそうです。しかし、倒壊は免れたため、翌日には臨時救護所として負傷者を受け入れました。

本川小学校平和資料館は、当時、小学校の校舎でした。原爆投下時、校庭にいた人は全員即死、校舎内にいた人も、生き残った人はたった2人でした。校舎は、広島初の鉄筋コンクリートの建物でしたが、熱風で講堂は鉄骨をむき出しにして燃えていて、鉄の窓枠も



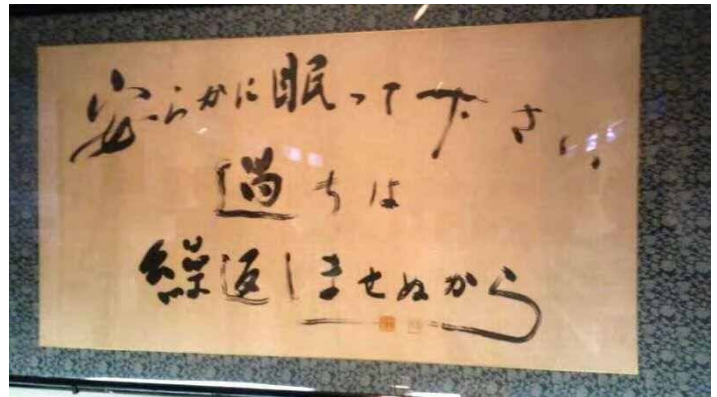
(被爆前後の広島)

戦後しばらくして修復され、それから約40年間、校舎として使われました。1987年に取り壊されることになりましたが、被爆者や市民などの「被爆の生き証人を残したい」という意見を受け、

被爆した校舎の一部と地下室が「平和資料館」として保存され、今に至ります。

本川小学校平和資料館では、現在の原爆ドームである、当時の広島県産業奨励館のバルコニーの柱や、本川小学校の運動場にあった「ニワウルシ」の木の一部が飾られていました。

また、被爆前後の広島の写真や曲った鉄兜と、焼けただれたモンペなど、たくさんの展示物がありました。その中で、最も印象に残ったものは、「安らかに眠って下さい 過ちは 繰返しませぬから」と



(原爆慰霊碑・碑文)

いう、平和記念公園にある原爆死没者慰霊碑に使われている原文です。前日に、慰霊碑を見してきました。この碑の文章には、主語がありません。碑を見ただけでは、誰が原爆を落とし、過ちを犯したのかわからないという議論がありました。現在では、主語は全世界の人間を意味する“WE”とされています。碑の前に立つ全ての者が核戦争を起こさないことを誓うという点でつくられています。平和資料館で原文を見た時に改めて優しさもあり、力強さもあって、一文だけでもこんなに伝わるものがあるんだなと思いました。

8月6日、平和記念公園で行われた平和記念式典に私たちも参列しました。式典では、広島市長の平和宣言や、総理大臣のあいさつなどがありました。国際連合事務総長のあいさつでは、広島が受けたダメージや、被爆した方々について、真摯に考えてくださっていました。

このメッセージから、被爆者への尊敬の意、広島への応援、核兵器廃絶に向けての決意を感じました。最も心に残ったのは、こども代表による「平和への誓い」です。小学6年生の二人が、戦争に向き合い、平和について考えている文章を朗読しました。この中に、「私たち

は、今まで受け継がれてきた命と平和への思いを受け止め、考え、自分たちにできることから、『小さな平和』を創ろうとしています」とあり、争いの怖さや醜さを考え、身近なところから良くしていこうという決意が伝わり、将来、大きな平和を創るきっかけになると感じました。

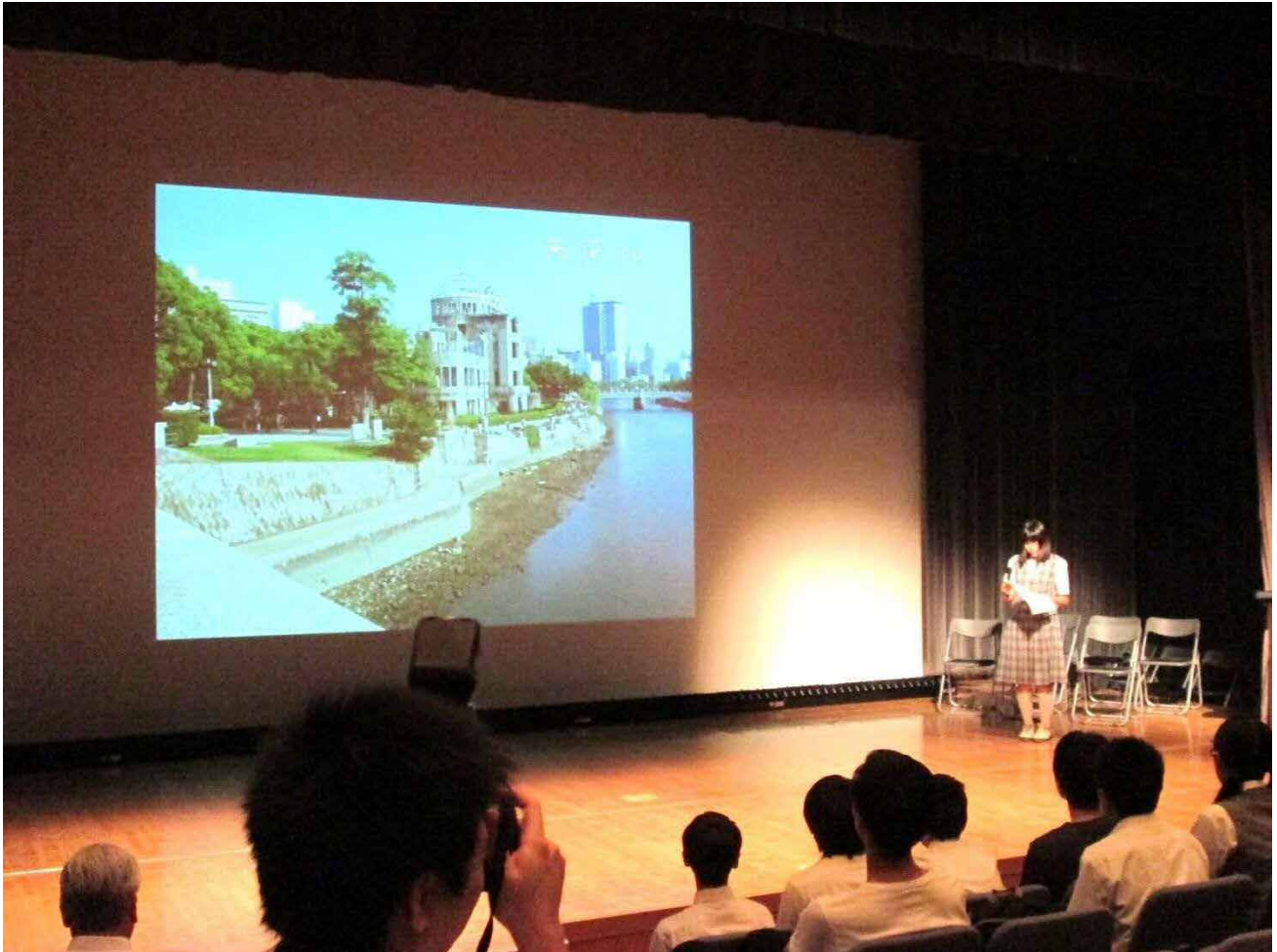


(平和記念式典)

未来へ

～ピースメッセージ～

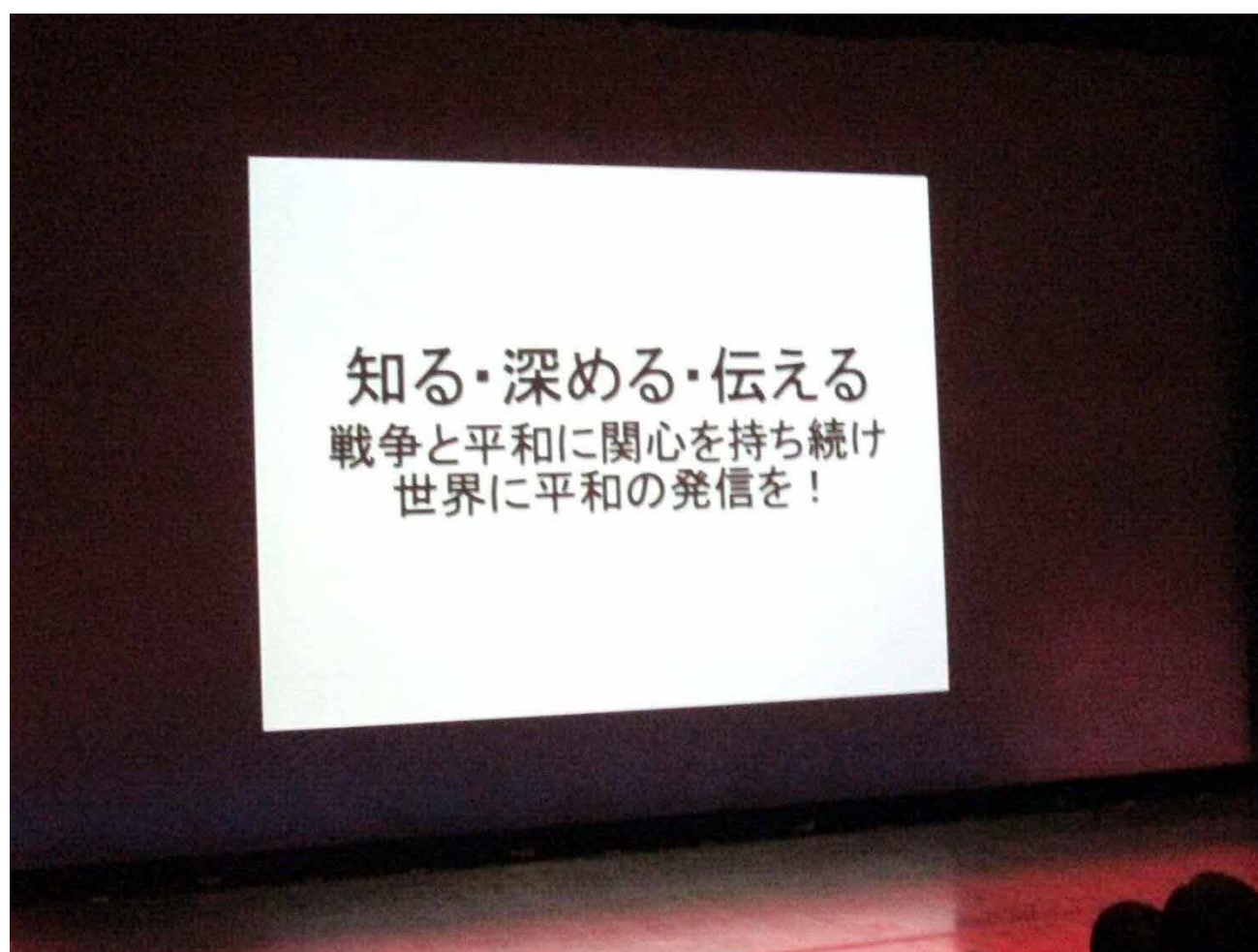
神戸 遥（青梅三中3年）



「平和ボケしている」これは、私たちが話を聞いた岡さんから言われた言葉です。今の私たちは、好きな事ができる、とても恵まれた環境の中で生きています。私たちは、偶然戦争のない国、戦争のない時代に生まれ、その中を当たり前のように生きています。しかし、これから戦争が起こらないという保証は、どこにもありません。ある日突然、戦争が始まってしまうかもしれません。だから、私たちは戦争がどんなものなのか、どうしてダメなのか、実際に何が起こってしまったのかを理解して、自分の考えを持ち、伝えていかなければなり

ません。広島で起きた事から目をそらさずに、見つめて、忘れ去られないように。自分の考えや行動をしっかりと見直し、自分のしていることが本当に正しい事なのか、本当に平和につながる事なのか、ただ周りに流されているだけではないか。そして、その考えを仲間と話し合い、分かち合えているか。そんな風に、一人ひとりが自分の事や周りの事を考えていけたら、過ちは少なくなると思います。このピースメッセンジャーの活動が、平和への道へとつながる事を願います。

ピースメッセージ発表



講評

ピースメッセンジャーの中学生の発表を終え、並木心羽村市長より講評をいただきました。



先の大戦では、太平洋やアジア大陸の各地で、激しい戦闘が行われ、多くの尊い命が失われました。次代を担う中学生が、原爆が投下された広島市を訪れ、戦争の爪痕や慰霊碑を見学するとともに、平和記念式典に参列するなど、自分で見て感じたことは、一生の大切なものとしてほしいと思います。

特に、グループごとに自分たちで見学先を決めたり、外国人にアンケートしたりするなど、自ら考え行動したことや、戦時中、同じ中学生だった被爆体験者と現代の広島市の中学生と一緒に対話する機会の中で、実際に戦争を体験された方から、戦争の悲惨さと平和の大切さ

を学んだことは、今後の人生に、大変、大きな意義があると思います。報告を聞いて、広島市に暮らす人達の気持ちをよく理解されていることが感じられましたので、今後の生活の中で、ピースメッセンジャーとして、平和の大切さを進んで広めていく第一人者になってほしいと願っています。

この様な取組が、広がっていくことを願っており、まずは、西多摩地域に広がっていくことを期待しています。

年々、戦争体験者の高齢化や社会の変化などによって、戦争の記憶を後世に伝えていくことが困難になってきています。

私達は、どのように時代が変わろうと、今日の平和と繁栄が、多くの尊い犠牲と先人のたゆみない努力によって、成り立っていることを忘れてはなりません。そういう意味で、皆さんが先頭に立って、世界の恒久平和のため、その普及啓発に取り組まれることを期待しています。

また、引率をいただいた学習指導員の先生方をはじめ、リーダーの皆さんには、事前研修から報告会まで、全ての行程を無事に成し遂げていただき、深く感謝申し上げます。

報告会 青梅市会場

平成 27 年 9 月 12 日（土）14 : 00～17 : 00

青梅市民会館ホール （参加者 419 人）



9 月 12 日（土）午後 2 時から、青梅市民会館を会場として報告会を開催しました。

報告会は、青梅市が主催した「戦後 70 年青梅市平和事業『海老名香葉子講演会・泰葉コンサート』」の中で実施し、来場者 419 人が、中学生の発表に聴き入りました。

報告会は、まず、代表者の 2 人（酒井 高行（青梅三中 2 年）・斎藤 若奈（羽村三中 3 年））が平和を願う作文を朗読しました。

平和を願う作文の発表

「平和のバトンをつなぐ」青梅市立第三中学校 二年 酒井 高行

1945年8月6日、アメリカ軍戦闘機B29が広島に原子爆弾を投下した。熱線、爆風、放射線が複雑に作用し、多くの人々が亡くなった。軍事重要拠点だった広島は、一瞬のうちに焼け野原となった。

それから70年経った今年。僕は、青梅市・羽村市の平和に関心を持つ中学生、「ピースメッセンジャー」の一員として広島へ行くことになりました。

広島では、沢山の人の名前が書かれた慰霊碑を見学したり、平和記念式典へ参加するなど、様々な活動をしました。そんな中で、僕が最も印象に残ったのは、新出さんという男性の方が話して下さった被爆体験です。当時、広島二中の二年生だった新出さんは、広島駅の北側にある陸軍の訓練場で被爆したといます。芋畑の草取り中、突然目の前が真っ暗になり、息ができなくなったこと。髪の毛が抜け、焼けるようなジリジリした痛みが襲ってきたこと。何もない広島市街を見て、「ただ事でない事が起きた」と悟ったこと。恐ろしい話ばかりで、僕は耳をふさぎたくなる場面もありました。話している新出さんも何度か辛そうな表情をしていました。

そんな様子を見て僕は、“新出さんはどのような思いで僕達に話しをしてくれているのだろうか”ということが気になり、質問をしました。すると新出さんは鋭い眼差しで答えます。

「戦争の事を思い出すのは辛いし、できることなら話したくない。でもね、今の平和なことが、ありえないくらいの奇跡だということをわかってほしいんだ。」

僕はハッとになりました。生活の全てが戦争につながっていた少年時代を生きた新出さん。勉強はしたくてもできなかった。食べたい物だって食べられなかったんだ。そう思った時に僕は・・・自分のことがとても小さく思えました。と同時に、僕が“当たり前”だと思っていたことが、全く当たり前ではなかったんだと感じたのです。遊ぶこと。食べること。学ぶこと。僕達は何でも自由にできるのは、今が平和だからだ、と思いました。

では、今、平和な日本に生きる僕達にできることは何でしょうか。

僕は、「今回感じたようなことを皆に伝えることだ」と思います。

僕が伝えたいことは二つ。「平和の尊さ」そして「自由の大切さ」。

これは新出さんが僕に気づかせてくれたことです。新出さんには感謝の気持ちで一杯です。

僕は今年、広島に行くことができ本当に良かったと思っています。

今、平和な世の中に生きていることを当たり前だと思わず、積極的に平和の為に行動して生きていきたいです。

羽村市立羽村第三中学校 三年 齋藤 若奈

私は、この事業で「外国人へインタビューをする」というとても特殊なことをやらせてもらいました。

今回なぜ参加させていただいたのかというと、学校で配られたチラシの「戦後70年」という言葉にひかれたからです。

学校でも太平洋戦争について勉強しました。しかし、主に場所や日付だけでした。だから、もっと知りたいと強く思うようになりました。

初回の事前研修は緊張しましたが、今では10回も会っていない仲間とは思えないほど仲良く、毎回笑いの絶えない時間を過ごしてきました。だから私は、このメンバーで行けて本当に良かったと思っています。

そのためか、広島に行く前日は、なかなか眠れませんでした。

そして当日、みんな元気に東京を出発しました。

8月4日、広島一日目、現地に着いてまず、原爆によって被爆した方の一人である、岡さんの被爆体験談を聞きました。その際、当時の中国地方の軍の司令部の地下通信室として使われていた地下壕に特別に入らせてもらいました。中は涼しくて、暗くて、天井が低かったです。「こんな所でお仕事をされていたのだな」と思いましたが、戦争というものを知らない15歳の私は、なかなか実感できませんでした。しかし、そんな私でも岡さんの話を聞き、想像するだけで鳥肌がたち、とても怖いものなのだ理解できました。

そしてその夜、班ごとに行われたミーティングで「平和記念公園に外国人がたくさんいたのが気になった」という一言から、私達の班は、外国人へインタビューすることになったのです。

質問は三つです。「なぜ広島に来たのか」、「原爆を使ったことについてどう思うか」、「平和のために私たちは何ができるか」です。

インタビューをしていて、私が一番印象に残ったのは「原爆を使ったことに対して」の質問に賛成の人がいたことです。その方はアメリカ人でした。私はとても驚きました。しかしそれと同時に、その様に考える方もいるのだと思いました。国や文化が違ければ、もちろん考え方も違うのです。だから、それを否定するのではなく、理解し合うことこそ平和への第一歩だと私は思います。

今回ピースメッセンジャーとして広島へ行き、たくさんの思いや考えに触れることができたこと。戦後70年が経ち、お話しを聞く機会が減っていくなか、貴重な体験ができたこと。広島での三日間で得たものを、今度は私たちが日本で起こった「戦争」というものが風化することなどないように、後世へ伝えていきたいです。



(司会：廣瀬 海凧（青梅泉中2年）、鈴木 虎太郎（羽村二中3年）)

最後に全員で、平和のために取り組む決意を以下のピースメッセージとして発表しました。

- 戦争で亡くなった人の分まで、今の日常を大切に過ごす
- かけがえのないものを奪った戦争の悲惨さを、次の世代へ伝えていく
- 違う価値観の人のことも尊重し、お互いに理解しあう
- 一人ひとりが平和について考え、小さな平和から生み出す
- 平和は当たり前ではないことを感じ、この一瞬を大切にする
- 戦争と平和に関心を持ち続け、世界に平和の発信を！

3 平和を願う作文

「広島派遣を通して」 青梅市立第一中学校 二年 松本 智稀

僕たちは8月4日、被爆体験者である岡さんの話を聞かせていただきました。動員学徒という制度により、岡さんは中学生でありながら広島城の敷地内にある地下壕「地下通信室」という所で働いていました。その中で岡さんが行っていた仕事は、「非常時に警報を発令する」というものでした。そして、原子爆弾が投下されたのは、いつもと変わらぬ日常の真っ只中でした。

1945年8月6日、早朝から米軍の戦闘機であるB29が一機、広島市上空を行ったり来たりしていました。後になって分かったことですが、このB29は環境に左右されやすい原爆のために天気や湿度を観測するために送られてきた戦闘機だったのです。午前7時半ごろ、岡さんは地下通信室を出て朝食を取りに行きました。朝食をとり、地下通信室に戻った岡さんですが、地下壕に入る前に見上げた空は青く、澄み渡っていたそうです。そしてその数分後、米軍の戦闘機エノラゲイとB29の編成隊が広島に飛来してきました。そして、岡さんが警報を発令しようとしたその時です。原子爆弾の閃光により、目の前が真っ白になりました。それと共に岡さんは、爆風によりふき飛ばされてしまいました。その後、岡さんは数分間気絶してしまいました。意識を取り戻した岡さんが周りを見渡すと、近くに一人だけ生存者を見付けました。彼女の名前は板村さんと言います。彼女以外の生存者はすでに、避難をすませていました。板村さんとともに地下通信室を出た岡さんは、板村さんをその場に残して、広島市を一望できる場所に登りました。すると、信じ難い光景が目の前に飛びこんできました。広島市内の、ほとんどの建物が倒壊していました。家もすべて倒れているため、瀬戸内海までもが見えたそうです。周りをみていると、岡さんがいる場所のふもとに、一人の兵士が倒れていることに気付きました。階段を下りてその兵士に近づくと、うめき声をあげながら「新型爆弾にやられた・・・」とだけ言い、力尽きてしまいました。急いで板村さんを待たせておいた場所に戻ると、そこに板村さんの姿はありませんでした。どこに行ったのか、とあせる岡さんが地下壕に戻ると、そこには板村さんがいて、仕事用の電話で誰かと会話していました。まだ使える電話があるかもしれない、と思った岡さんは、周りに落ちてる電話を片っ端からためしてみました。数個目の電話でようやく、どこかの司令部に連絡がとれました。真っ先に岡さんは、「広島がやられました!!」と叫びました。通信先から、「何があったんだ、説明しなさい」と返答されたので、岡さんは悩んだ結果、先ほど倒れていた兵士から聞いた言葉を思い出しました。「新型爆弾に、やられました・・・」岡さんがそういうと、相手は「新型爆弾!？」と驚いていました。そこまで話した所で、いきなり窓から炎が飛びこんできました。原子爆弾が爆発した数分後に立ち上る炎です。やがて地下壕に火の手が迫り、岡さんと板村さんと外に脱出しました。外に出ると。そこにはもはや岡さんの知ってる景色はありませんでした。建物の倒壊に加え、一面焼け野原になっていたのです。炎に囲まれ、二人が死を覚悟したとき、放射線を多く含む黒い雨が降りそそぎました。

こうして岡さんの、そして広島の日常は数分にしてうばわれてしまいました。争いは醜く、恐ろしく、全てをうばってしまうものです。そんな争いを無くすには、相手の意見に耳をかたむけ、お互いを尊重しあう意思が大切です。この国が二度と過ちを犯し、悲惨な目に合わないようするためには、周囲の人間を尊重しあう意識が必要だと思いました。

「ピースメッセンジャー」 青梅市立第二中学校 一年 渡邊 結子

「戦争は恐ろしいものだ。」私は今回の広島への派遣で人々はどんなことに苦しんだのか、何が怖かったのか本当の恐ろしさを知れた気がします。

一日目の岡さんの話を聞いた場所は、岡さんが実際に被爆した場所で、ここが原爆が落とされた当時から変わらずにあると思うととても不思議で少し恐かったです。岡さんの語り方はこの悲劇を世の中に広めてほしいと、訴えかけているように感じました。二日目は、平和記念資料館に行きました。資料館には見るのも辛い物や写真等が沢山あり、正直私も見たくないと思っていましたが資料館には多くの外国人がいて、日本人が外国人に、外国人が世界へと広げれば世界から戦争が無くなると思いました。そのために私達が戦争について学ばないといけないと分かりました。また、旧制広島二中の被爆者の方との対話では、原爆降下後の生活の苦しさに涙をこらえるのに必死でした。どうにか助かっても白血病等の病気で命を落としたり、被爆者だからと婚約破棄されたりと差別を受けていて、食べ物が無い中の生活に頑張っても耐えてもこういう事に悩み苦しみました。そして平和記念公園で一番初めに目に飛び込んできたのがやはり原爆ドームです。これだけで核兵器の威力が一目で分かりました。また公園内には沢山の慰霊碑がありその中でも平和の泉や祈の泉等、原爆降下直後被爆者は水を求めていたため、水に関する慰霊碑がありました。被爆者の方は広島にあんな被害をもたらしたアメリカが憎くないのかと疑問に思いました。その答えに私は驚きました。

「外国の文化、音楽は好き」と言っていました。中にはアメリカを嫌う人もいましたが、私には考えられませんでした。三日目には私達も参列させていただいた平和記念式典には被爆者の方、そして多くの一般人がいました。それを見て、全員が平和を願っているということが改めて分かりました。

今、私達は平和に暮しています。この平和を守り続けるのには私達の手にかかっています。七十年前の人が命がけで守ってくれた日本を今度は私達が守らないといけません。世界の永久平和のために努力をし続けます。

「平和のバトンをつなぐ」 青梅市立第三中学校 二年 酒井 高行

1945年8月6日、アメリカ軍戦闘機B29が広島に原子爆弾を投下した。熱線、爆風、放射線が複雑に作用し、多くの人々が亡くなった。軍事重要拠点だった広島は、一瞬のうちに焼け野原となった。

それから70年経った今年。僕は、青梅市・羽村市の平和に関心を持つ中学生、「ピースメッセンジャー」の一員として広島へ行くことになりました。

広島では、沢山の人の名前が書かれた慰霊碑を見学したり、平和記念式典へ参加するなど、様々な活動をしました。そんな中で、僕が最も印象に残ったのは、新出さんという男性の方が話して下さった被爆体験です。当時、広島二中の二年生だった新出さんは、広島駅の北側にある陸軍の訓練場で被爆したといます。芋畑の草取り中、突然目の前が真っ暗になり、息ができなくなったこと。髪の毛が抜け、焼けるようなジリジリした痛みが襲ってきたこと。何もない広島市街を見て、「ただ事でない事が起きた」と悟ったこと。恐ろしい話ばかりで、僕は耳をふさぎたくなる場面もありました。話している新出さんも何度か辛そうな表情をしていました。

そんな様子を見て僕は、“新出さんはどのような思いで僕達に話をしてくれているのだろうか”ということが気になり、質問をしました。すると新出さんは鋭い眼差しで答えます。

「戦争の事を思い出すのは辛いし、できることなら話したくない。でもね、今の平和なことが、ありえないくらいの奇跡だということを知ってほしいんだ。」

僕はハッとしました。生活の全てが戦争につながっていた少年時代を生き抜いた新出さん。勉強はしたくてもできなかった。食べたい物だって食べられなかったんだ。そう思った時に僕は・・・自分のことがとても小さく思えました。と同時に、僕が“当たり前”だと思っていたことが、全く当たり前ではなかったんだと感じたのです。遊ぶこと。食べること。学ぶこと。僕達が何でも自由にできるのは、今が平和だからだ、と思いました。

では、今、平和な日本に生きる僕達にできることは何でしょうか。

僕は、「今回感じたようなことを皆に伝えることだ」と思います。

僕が伝えたいことは二つ。「平和の尊さ」そして「自由の大切さ」。

これは新出さんが僕に気づかせてくれたことです。新出さんには感謝の気持ちで一杯です。

僕は今年、広島に行くことができ本当に良かったと思っています。

今、平和な世の中に生きていることを当たり前だと思わず、積極的に平和の為に行動して生きていきたいです。

「平和を願う作文」 青梅市立第三中学校 三年 神戸 遙

「何が悪いのかを見きわめる」これは、私が広島に行く前に考えた抱負でした。

私がピースメッセンジャーに応募しようと思ったきっかけは、父が偶然新聞でこの企画を見つけ、私に勧めてきたからでした。最初私は、「なんとなく興味があるからやってみようかな」と、そんな気持ちでした。そして、応募したあとに必要な作文を書く時に、初めて戦争や原爆の事について調べ、その事について考えました。

私はその作文を書いた時、平和とは何なのかを考えてみる事にしました。何が悪くて、平和が壊れてしまうのか。そう考えてみると、何が悪いのかわからなかったのです。だから私は、悪いのは何なのかを確かめたいと思いました。

広島に行って私たちは、実際に原爆を体験し、辛い思いをした方々、原爆の悲惨さを文字にし、小説を書いている方。たくさんの人からお話を聞きました。それぞれ体験した事や感じている事は違いましたが、共通して思っていた事は、「戦争を繰り返さないでほしい」「次世代へと語りついでほしい」という思いでした。この方々ではなくても、広島に行って関わった人は、世界中の人々が平和を望んでいるということがわかりました。

では、どうして平和は壊れてしまうのでしょうか。みんなで意見を交換し合った時に、とても印象的な言葉がありました。それは、「戦争と喧嘩は、規模は違うけど同じこと」という言葉でした。確かに、その通りだなと思いました。戦争と喧嘩は同じように、少しの意見の食い違いから起きてしまいます。私たちの周りには、戦争は無いけれど喧嘩はたくさん起こっています。その些細な喧嘩を減らすためには、相手の気持ちを思いやる事や、自分の意見をしっかり見つめ直す事だと私は考えています。

結局、何が悪いのか具体的な事はあまりわかりませんでした。でも、具体的なものではなくて、身近な「争い」を無くしていく事が、平和へと繋がっているのだと思いました。

私は、平和への思いは、人それぞれ違うものなのだと考えています。だからこれから生きていく人たちみんなに、自分なりの考えを見つけてもらいたいと思っています。戦争や原爆についての事をほとんど知らなかった私にでも見つける事ができました。だから、誰にでもできる事だと思います。そして、もし戦争や原爆が無い世界になったとしても、忘れないで戦争を繰り返す事の無い世界を造っていきたいです。

戦争を体験した方は、「戦争から得たものは何もない」と仰っていました。人が人の命を奪うことは、何の意味も無い悲しい事だと思います。

世界中の子供や大人が、みんなで笑えるような日が来ることを心から願います。

「平和という奇跡」 青梅市立西中学校 二年 成宮 友基

ピースメッセンジャーはとても良い経験でした。これまでもテレビや本などで戦争について知る事はできましたが、今回は実際の体験を聞く事で、その方がどう思ったのかなどまで知る事が出来、班員の皆で考えて話し合う事が出来て、その後もピースワークショップで大人の人達とも世代を超えた話し合いが出来た事もとても良かったです。とても貴重な体験で文章にするのも実際難しいのですが、自分が思った事を書こうと思います。

広島にて被爆を体験した方々の話を聞き、70年も経っているのに、一人ひとり細かいところまで覚えておられるのには驚きました。その話の中で意外に思ったのは、例えば「黒い雨が降って来たおかげで火が消えた。その時は天の助けと思った。」や「キノコ雲はキラキラしてきれいだなぁと思った。」という話。今は黒い雨には放射能がある事、キノコ雲は原子爆弾の爆発だという事は分かります。ただその時は原子爆弾や放射能の情報があるはずもなく、大変な混乱の中だったと思うので、それぞれ違ったように見えたのかも知れません。その様な話を聞くのは初めてでした。今日本は戦争をしていないので、世界的には平和です。しかし体験談を話してくれた人達が「この平和が続いている事が奇跡だ」と言っていました。そして自分達に「正直、今の皆は平和ボケしている」、「平和に慣れすぎてはいけない」などと言われました。平和な毎日は当たり前では無い、そんな事は今まで考えた事も無かった・・・と思いました。ただ単に平和は大切だという事はわざわざ広島に行かなくても頭では分かります。広島で学んだ事を通して、平和はどれほど大切な事なのかを知る事が出来たと思います。

広島から帰ってしばらく経ち、普段の三日間はあつと言う間に過ぎていくのを感じて、あの三日間を今ではとても濃く、深く、そして長く感じます。あんなに皆で同じ事について考え、深め合い、語り合う、そんな事めったに出来ない事だと思います。そして生の戦争体験をした人達が語ろうと思った事をそのままに語ってくれる、とても貴重な体験でした。そんな貴重な体験を無駄にしないように自分に出来る事を考えて、まず忘れないようにしよう、と思いました。そうすれば伝える事や考え続ける事が出来るからです。ここまで色々書いてきましたが、やはり言葉にするのはとても難しいです。けれども良い経験だったと思います。全てが良い経験だったと。そしてこの平和という奇跡がいつまでも続いて欲しいと思いました。

「平和について考える」 青梅市立第六中学校 三年 小峰 詩菜

私は8月4日から6日までピースメッセンジャーとして広島に行ってきました。

広島では教科書では知ることのできなかつたことをたくさん知ることができました。私が一番印象に残っていることは、当時広島二中の2年生だった方から聞いた話です。聞いている最中、耳を塞ぎたくなるときが何度かありました。聞いているだけの私たちがこんな気持ちになるのに原爆を体験した人たちは私たちに話す度思い出してどれだけつらい気持ちになりながら話してくれているのかな、と思いました。でもそんなつらい気持ちになっても私たちに話してくれるのは、戦争はしてはいけない、過去から目をそむけないでほしい、平和を保ってほしい、という気持ちがあるからだと思います。

当時広島二中の2年生の方は、

「普段友達とするケンカと戦争は規模が違うだけで同じだ。お互いの意見をしっかりと聞けば起こらない。」

と言っていました。確かにそうだな、と納得しました。その方は戦争が終わった後にアメリカの曲を聞いたとき、アメリカにはこんなに良い曲があるのか、と思ったそうです。そして、相手の良いところをもっと前から知っておけば戦争は起こらなかったのではないかとその時に思ったそうです。

平和とは何か、という質問をしたところ、

「食べ物があること、友達や家族がいること、勉強ができる。」

と言っていました。私たちにとっては当たり前のことですが、戦争を体験している人にとっては当たり前ではありません。今でも外国では紛争が起こっています。日本はいつ戦争が起きるかわからない状態です。これからの日本は私たちが築いていきます。過去にあったことから目をそむけず、戦争についてしっかりと考え、それを周りの人たちに伝えていき、二度と戦争が起こらないようにしていきたいです。

「自分にも出来る平和を探す」 青梅市立第七中学校 二年 手塚 光希

僕は広島へ行く前、「自分にも出来る平和を探す」と目標を決めた。世界が平和になるためには、と考えると僕には表面的な言葉しか浮かんでこなかったもので、自分の身近な所から見直し、何かを発見しようと思った。そして、広島での数多くの体験、ピースワークショップでの被爆体験者の方々と話し合いを通じて、身近な所から社会を良くしていくために、次の四つ、知る、認める、感謝する、尽くす、に取り組んでみようと考えた。

まず一つ目は「知る」。僕はまず戦争のことについて知ろうと思った。一言で戦争と言っても、経緯、関係する国、その民族、文化、どんな事があったか、人々の思い、終戦した後の事など、理解したと言えるようになるまでに多くの情報がある。関わった国が多ければなおさらだ。知識を得ることは、それだけ相手に対する誤解が減り、正しい言動をすることにつながると思う。そして今自分が何をしたら良いか、将来どうすれば良いのか、自然と見えてくるのではないだろうか。実際に現地に行って実物を見る、聞く、これは、詳しく「知る」、一番良い方法だと今回のピースメッセージャーで学んだ。

二つ目の「認める」は、相手をよく知った上で初めて出来ることだ。違う価値観を持った者と出会った時、それを認めないと衝突してしまうことがある。それが多数と少数、または力の有る者と無い者に分けられると、いじめや社会的差別の問題につながる。ただ、認めるためには多少の我慢が必要だ。衝突しない為に、相手の言い分を受け止めた上で自分の意見をもう一度検討するのだ。広島や羽村で行ったピースワークショップの「反論はしない」に似たやり方かもしれない。例えば、自分のクラスにあまり好まない人がいるとする。何人か集まったらそんな人が出てくるのは当然だ。その人を好きになれという訳ではない。その人の言動を、「嫌いだから、自分とは合わないから」という理由で最初から否定するのではなく、関心を持つ。そこから、新しい何かが見つかるかもしれない。そうやって、人と接せたら良いと思う。そしてそれは、国と国の関係にこそ求められるものだ。

三つ目は「感謝する」。今日僕は御飯を食べてきた。それをあたり前とさえ考えずに。僕は今まで食事を抜いたことはほとんど無い。だから、食事をおいしいと思ってもありがたいと思ったことはない。でも、今回戦争経験者の方々のお話を聞いて、空腹の苦しさを想像することはできた。ありがたいと感謝するモノは大切にする。大切なモノは大事にする。僕達は、「大事にすべきモノ」が判っているだろうか。岡さんは、「平和ボケしている」と仰っていた。その実感はあるだろうか。

最後の四つ目は、「尽くす」。これは、人のために尽くす。思いやるということだ。見返りを期待せずに尽くせば、された方は気持ち良くなるだろうし、実は、した方にも結果的に何か得る物はあるのだ。そんな輪がわずかずつにでも広がったら、人の心が少しは変わるのではないか。何をどう行うかは自分で考えなければならない。僕達ピースメッセージャーは、自分の感じた事を伝えている。これも、「誰かのため」になると思う。

この四つは本当に努力が必要だと思う。だからといってこれらを厭だと思いつつやりたくはない。基部としてやっても意味がない気がするからだ。

これは「今」の自分の考えで、いろいろな事を経験する度に当然変わる。だから、それを固定観念で封じないようにしたいし、そんな事を忘れないでいる自分でありたい。

青梅市立第七中学校 三年 中村 結夏

1945年8月6日午前8時15分。広島に新型爆弾、原子爆弾が落ちたそれから70年。私は、羽村市の中学生と、ピースメッセンジャーとして広島へ行った。

もともと私が行こうと思ったのは、戦争をもっとよく知り、平和というものについて、同世代の人たちと考えてみたいと思ったから。戦争はいけない。頭ではわかっている。では、戦争とはなにか。私の周りにはそれをしていない者はいない。だからもっと深く知りたいと思ったし、体験者の方々から話を聞ける最高のチャンスだと思った。

2015年8月4日。一日目。私達は岡ヨシエさんという当時比治山高等女学校の生徒さんで、広島壊滅の第一報をしたという方の話を聞いた。岡さんはこう言った。

「戦争で亡くなった人がいたから、今の私達が幸せである。絶対に戦争をしてはいけない。絶対平和を守って見せる。」

と。私はこれを聞いたとき、戦争を体験した人、普通の人とは違う平和への意思、訴えが聞こえたように思えた。その後は、平和記念公園で原爆ドームや被爆した墓石などを見て回った。これらは、リアルに原爆、戦争の悲惨さを物語っていた。

二日目は、旧制広島県立第二中学校23期生の方々から体験した話を聞いた。当時広島二中の1年生の人たちは全滅している。そんな悲しい事実から目をそらさず、当時2年生の方々は語ってくれた。涙を流して話してくれる人もいた。私はこの人たちの姿を見て、この人たちが話してくれたことを自分の中で留めておいてはいけない。この人たちの熱き思いを私たちが語り継いでいかななくてはならないと思った。体験談を聞く前には、平和記念資料館に行った。そこには、焼けこげたお弁当箱や三輪車、悲惨な姿のジオラマなど、思わず目をそらしたくなるような展示物がたくさんあった。

三日目。私たちピースメッセンジャーは、平和記念式典に参加した。子ども代表の言葉。共感するところもあり、年下ながら、引っ張られるところもあった。その後には、残った一部を資料館にした、旧本川小学校に行ってきた。そこで私はこんなものを見た。「安らかに眠って下さい過ちは繰返しませぬから」という文を。これは平和記念公園の中央にある原爆死没者慰霊碑に使われている文の原文。これを見た時、何ともいえない思いだった。優しいような、力強く芯がしっかりしているような感覚だった。

これは幻ではない。実際に起きた事実なのだ。現代の人々はこの事実から目をそらしがちだ。岡さんにも言われた。「平和ボケしている」と。確かにそうだ。平和と言われたってどんなものなのかわからない。私も事実から目をそむけているのかもしれない。でも、事実から目をそらさない。向き合っていく。これがこれからの人々の課題なのだと思う。

「私にできる平和」 青梅市立霞台中学校 二年 本橋 ゆりえ

私は今まで、社会の歴史や戦争は好きでしたが、ただ好きなだけで止まっていました。だから戦争をすることで、何がいけないとかを聞かれても何とも答えられませんでした。だから私は今回の二泊三日の活動のなかで、本当の戦争とは何かをしっかりと学んでこようと思いました

この三日間では、沢山の活動をしました。岡さんのお話では、やはりテレビや本で見るよりも説得力がありました。また、当時のことが今、目の前で起きているかのようにも感じました。

式典にも参加しました。多くの国から人が集まっています、日本が唯一の被爆国としての役割を果たしていると感じました。毎日、戦争を体験した日本人の平均年齢は上がり続け、本当の戦争を知らずに平和について考えている世代が社会の中心になってきています。これからの未来をつくる私達が戦争について無関心のままでは未来は変えられないので、私は皆にもっともっと戦争について知るべきだと思いました。そのために私がこれから行いたい活動は二つあります。一つ目は、
〈身近なところから小さな平和をつくること〉

です。この身近とは友人や家族にあたります。岡さんも友人や家族がいるのはとてもありがたいことだと言っていました。そしてこの場合の平和とはケンカやいじめをしないにあたります。身近なところからケンカなどをなくしていけば、小さな平和が沢山生まれます。

二つ目は、〈知る、深める、伝える〉です。知るとは戦争の悲惨さのこと。深めるは、知ったものを本やパソコンで調べることによって、戦争に対する興味を深めるということ。伝えるは、ただ知って深めるだけではそこで止まってしまうから、それを皆に伝えることによってまた知った人が興味を持つことによって深まり、またそれを伝えることによってこれから先、後世にも戦争の悲惨さが受け継がれていくと思います。私は今回の体験を通して、戦争に対するとらえ方も、戦争の意味も少しだけですが分かりました。これからは自分の口で、言葉で伝えていこうと思います。そして、どの世代の人々にも納得されるような平和をつくる努力をしていきます。

「平和を願って」 青梅市立吹上中学校 三年 小暮 愛理

私が平和のためにできることとして考えたことが二つあります。

一つ目は戦争中や原爆のことを伝えることです。学校でも習うことですが、教科書だけでは分からないことも多いと思うからです。戦争中に起こった事実だけで体験した人たちが当時思っていたことなんてのってないし、授業で聞くこともありません。私は体験談を聞きましたがこれほど説得力のあるものはほかにないと思います。事実を並べただけよりも、頭に残りやすかったです。今回体験された方から聞いたことを自分で話すことで伝えられなくても、きちんと残していかななくてはならないと思います。

二つ目は、伝えられるのを待っていてはいけないということです。今回聞いた体験談の中で、「今の平和は多くの人々の犠牲の上に成り立っている」とか「長い間平和でいられていることは珍しい」とか「今の平和は奇跡」などと言っていました。実際第一次世界大戦後、平和に慣れて戦争を知らない人が増えたころ、太平洋戦争や第二次世界大戦は起こりました。今現在核兵器を持っている国は多く、核戦争が起こる可能性がないとも言えません。平和な日常生活がくずれおちてしまう日が来るかも知れないのです。伝えてくれるのを待っていては遅いと思います。伝えてもらえる機会も減っています。体験談や手記などの資料で自分たちの方から知っていかなければならないと思います。

私は今回初めて広島に行って体験談を聞き、平和記念資料館で原爆が落とされた後の惨状を知りました。これだけでは人に伝えられるとは思っていません。私はもっと戦争について原爆について知っていかなければならないですし、そうしていきたいと思います。私が体験したわけではないから大変だとは思いますが、伝えていけるように、残していくことができるようになりたいです。

「広島県に行って感じた事」 青梅市立新町中学校 三年 尾崎 菜々子

私は、広島県に行って原子爆弾の威力を身に染みしました。物産陳列館の骨組みだけが残っていたり、黒い雨が障子にポツンポツンとたれてるものや、皮膚がたれさがり歩いている模型的なものがありません。又、ケロイドや急性障害、残留放射線など自分達が分からない内容の言葉もたくさんありました。被爆された方の話なども聞き、自分たちが生きているというのはすごいことなんだなと思いました。

そして私が被爆者の方の体験を聞いて心に響いた事はたくさんあり、その中の一つは、岡さんが言っていた、「今ある平和は誰かの犠牲による平和だ」という言葉です。確かに神風特攻隊や何も悪くない市民などたくさんの方へ被害がでました。そして、その言葉から私が思うのは、このような戦争をもう、二度としないしてほしいという岡さんのいや被爆された方全員の気持ちなのではないかと思います。

そしてもう一つは、当時広島二中生だった山本さんの話の中にあつた「エノラゲイとは機長の名前である」ということです。私は、それを聞いた時ビックリしました。なぜかというエノラゲイという名前は、国が付けていると思ったからです。そして、その機長の母は自分の息子は英雄だと言っていたという話を聞き、なぜ人を殺すことがそんなにも偉いのだろうかと思いました。なぜ日本は、アメリカに負けるって分かっているでも戦争をしたかったのでしょうか。そしてなぜ日本も特攻なんていうものを作ったのでしょうか。負けると分かっていたなら早く降伏すればよかったのに。私はそう感じました。

この世の中から戦争や内戦を無くす事はきっと無理に近い事だと私は思っています。どんなに戦争反対というデモがいてもきっと無くならないと思うからです。でも私達はデモ活動なんてしていません。ただこの平和が何十年先も続いてほしいだけです。そして被爆された方々は、80歳や90歳と高齢化してきています。いつ倒れるか、いつ亡くなるか分からない。でも私たちは、まだ亡くならない。だから私たちが被爆された方々の話を引き継がなければなりません。その為に羽村市と青梅市のピースメッセンジャーだと思います。私たちと同じくらいで被爆された方々の話をこれから先何年、何十年たっても伝えていける人になりたいです。

青梅市立泉中学校 二年 廣瀬 海風

『もっと勉強したかった。』現在は勉強ができるのはあたりまえのことですが当時は全然出来なかった、と被害者の岡さんは話してくださいました。当時岡さんは中学生で空襲警報などを通信する仕事をしていました。岡さんが働いていた防空壕に入ると薄暗く湿った感じの不気味な所でした。1945年8月6日。岡さんはその日も防空壕のなかで仕事をしていました。岡さんが警報を発令しようとしたその時、原子爆弾は爆発しました。これにより岡さんは気を失いました。しばらくして目を覚まし防空壕の外に出ると、音はひとつもなく空は白くモヤがかり街はどこまでも赤茶色になっていたそうです。

当時、大人の男子は国に命を預け兵隊となり多くが戦地に向かいました。岡さんを含む中学生ほどの子供たちはお国のために、と動員学徒として働いていました。勉強ができること、なりたい職業に就けること、ご飯が食べられることそれらは戦争をしていた七十年前にはいっさいあたりまえのことではありませんでした。

私は広島へ行く前まで平和で自由な生活はあたりまえでこれからもずっと変わらないものだと思っていました。けれども戦争を体験した方の話を聞き、色々な意見を持つ人と話し合っていくうち、平和そして平凡な日常は努力しなければ続かないということに気付きました。

そこで私は平和を守るために行うべきことを考えました。一つは外国の文化、考え方を理解し交流していくこと。もう一つは70年前にあったことを「昔のこと」とせずに学び、次の世代に戦争の悲しさ、おろかさを伝えていくことです。岡さんたち戦争体験者がきっと思い出すのも辛いような体験を一生懸命私達子供に伝えてくれるのも、私達に平和を大切にしてほしいと伝えたいからだと思います。平和を維持するために一人ひとりには微力でもみんなが平和について考え行動を起こすことが必要だと思います。

平和記念公園に平和の鐘というモニュメントがあります。この鐘には世界地図が描かれています。しかし普通の地図にはあるものがありません。それは国境です。国境がなければすべての国が地球の一部で戦争は起こらないという考え方から作られました。私はこれに感動しました。そんな風にすべての国が同等で世界中の人が笑顔でいられる時が来てほしいと思いました。

「平和は日常にある」 青梅市立泉中学校 三年 峯邑 康志

1945年8月6日の広島は、戦争中であっても朝食を摂り、弁当を持ち、学校や仕事場へと向う日常生活が存在していました。8時15分に投下された原子爆弾は、一瞬で14万人もの人々の命を奪い、辛うじて生き延びた者を地獄に突き落としました。

放射能による被害は、長期に渡って体を蝕みました。そして、被爆者の子どもが被爆するという被爆二世が現れるようになりました。また、放射能で汚染された野菜や米を食べ続けると内部被曝となります。症状としては、倦怠感や目眩等があり、酷いと肉眼では見えない「放射能」によって死に至ることがあります。被爆者は、その苦しみの体験を心の奥底に閉じ込めています。ある人は、「語りたくて語っているわけではない。被爆者の責務として、広島や長崎のような辛い思いを二度として欲しくないから伝えているだけだ。」と言っていました。私は、広島を訪れ、そのような話や平和記念資料館を見て、原子爆弾による放射能の恐ろしさが一番心に残りました。

「平和の灯」は核兵器がなくなるまでずっと燃やし続けています。現在、世界には約1万7千発の核兵器があり、平和利用として、核が原子力発電所で使われています。そうであるならば、チェルノブイリや福島の原子力発電所の事故も核兵器が落とされたことと変わらないのではないのでしょうか。

私は広島に行き、これらのことについて、知り、考えを深めることができたと感じます。広島に行くまでは、戦争がないことイコール平和だと思っていました。今でもそのことは間違いないと思っていますが、人それぞれの平和の捉え方が違うなと感じました。和気藹藹と食卓を囲めること。充実した教育が受けられること。それらは、私たちの殆どの人が、当たり前のように過ごしている生活だけです。戦争を体験した人は、そのようなことが「平和」だと言っていました。

しかし今、日常の生活を大切に過ごし、平和だなと感じている人は数少ないと思います。私自身、広島に行くまではそう感じていませんでした。もっと日常の生活の送れる有り難さを感じてみたらどうでしょうか。世界中の人全員が心から感じる事ができたとき、世界が平和になると思います。

「平和を願って」 羽村市立羽村第一中学校 二年 柴田 紘希

私達は8月4日から8月6日の三日間で広島に行きました。広島には昨年に自分の兄が同じ市の企画で行ってきたので興味を持ちました。広島に行って平和記念公園を見てきて最初に感じたことがあります。それは平和記念公園がとても広い事です。最初はその事について何も感じませんでした。が、しばらくして考えてみると、それだけの広さを平和記念公園に使う必要や使う価値があったということだと思います。それだけ広島での出来事を繰り返してほしくないと思っているのだと思います。

平和記念公園に行ってもう一つ気づいた事があります。それは平和記念公園内にある慰霊碑や記念碑のほとんどが違う人物や団体によって作られた物であるという事です。それはつまりそれだけの数の人や団体が原爆を使われた事に対して悲しんでいるという事です。

私達と一緒に広島に行った班にアンケートという形で広島に来た外国人に原子爆弾を使用した事が正しい事だったかどうかや、広島に行ってどう感じたかなどを聞いた班があります。そのアンケートをした結果分かった事があります。それはアメリカが原爆を落としたことを良い事だと思った人はいてもそれがもう一度繰り返されてほしいと思う人はいない事です。インタビューをした外国人の方の中には、広島に行くまで大きな戦争があるなら原子爆弾を使ってもいいと考えていた人もいたそうでした。つまり外国人の方も私達と同じような考えを持っているという事です。広島に8月の前半に行く外国人のほとんどは、おそらく平和記念公園や原爆ドームを見に来ていると思うので、この時期にインタビューをできてよかったと思っています。自分の家の近くには、今は半分子供たちの遊び場となっている神社があります。その神社の中にある石碑には太平洋戦争で亡くなってしまった人の名前があって、その中には自分の祖父の父親もいます。また前のような戦争が繰り返されない事を願います。

羽村市立羽村第一中学校 二年 原島 拓登

僕は広島に行き、いろいろなことを学びました。けしてテレビや授業では知ることはできないことを知りました。その一つとして、被爆者、岡さんからお話を聞きました。その話から、これまでに聞いたことのない発言がありました。

「爆風が起きて外に出ると建物が全て壊れていました。そして、中に戻ったら火が噴き出しました。」原子爆弾が落ちた時、すぐには火があがらなかったのです。つまり、街は燃えていなかったのです。僕のイメージでは、落ちた時の爆発で火がすぐにあがったと思っていました。この発言を聞いた時、あぜんとしました。

他にも旧制広島二中 23 期生の方とお話をしました。その方は当時 2 年生でした。8 月 5 日は 2 年生と 1 年生は同じ場所で作業をしていました。でも、その夜、中学校の先生が、「明日は、2 年生だけ、違う場所でやりましょう。」と言ったので 8 月 6 日は広島駅の北側、爆心地から遠い所で作業をしました。そのため 8 月 5 日と同じところで作業していた 1 年生は、爆心地に近く、全員が亡くなりました。たった 1 日前の先生の発言により、生死が分かれたのです。そのことを聞いた時、驚きました。

僕は、たくさんの人々を犠牲にしてまで戦う理由が分かりません。それなのに戦い続ける人類はくるってしまっています。同じ人類なのだから仲良くすればいいじゃないですか。この世界で、どんな理由があろうとも、戦争は許されないものです。

僕は、平和であることを願います。そして、軽い気持ちで、「戦争しよう」、「平和がいいよ」とは言わないでもらいたい。ただ、なんとなく、といった理由で発言しないでください。そして、戦争はだめだ！平和であるべきだ！などといった、台本を読むかのような、きれいごとを言わないでください。そんな簡単な問題ではないのです。このことを踏まえて、いろいろな戦争の現状を知った上で、発言をしてください。僕はこう思います。

羽村市立羽村第一中学校 三年 菊池 らん

私は、今まで戦争のない時代を生きてきて、平和だな、と思ったことが、あまりありませんでした。それは、戦争の悲惨さをあまり知らなかったからだと思います。でも、今回広島に行って被爆者の方の体験談をお聞きし、戦争というものを身近に感じることができました。今、こうして普通に生活している中で、いきなり戦争が起こるかもしれない、という危機感や恐ろしさまで考えることができませんでした。私たちが好きなものを好きなだけ食べて好きな事を好きなだけできる。これを当たり前だと思っただけはいけません。戦争で犠牲者が多く出たからこそ、今の時代があります。「あやまちを繰り返さない」この考えも、戦争をしたことがあるからこそその考えです。

私が、被爆者の方の体験談を聞いて一番印象に残ったことは、生き残った人へ向けた批判の目です。私は、生き残ったら喜ぶものだと思っていたからです。でも、実際は違いました。「どうしてだろう」と私は思いましたが、「自分の娘は死んだのになぜあなたが生きているの?」という思いがあったそうです。梶山さんの本を読み、それが痛いほど伝わってきました。生き残った方は、その周りからの批判の目に耐えながら、毎日生きていたそうです。その話を聞き、命の大切さを改めて感じることができました。

私は、「戦争当時の様子を知る」を目標に広島に行きました。歴史の授業くらいでしか戦争のことについて考えたことがなかったので、直接被爆者の方々の体験談を聞いて、当時の様子を細かく知ろうと思ったからです。そして私は、想像していたより多くのことを学んでくることができました。これから私たちは、この学んできたことをピースメッセンジャーとしてたくさんの人に伝えていかななくてはなりません。伝えることによって、平和は守られると思います。でも、そのためには、まず、戦争に興味を持ってもらう必要があります。そして、私たちが伝えたものをまた他の人に伝えてほしいです。被爆者の方々も、だんだん減ってきているので、直接お話を聞くことができた私たちが伝えていくべきだと思います。

私たち、ピースメッセンジャーが、今の平和を保っていくための役に立てればと思います。現在でも安保法案などでているので、署名運動にも参加し、平和を保って行きたいです。それが、今の時代を平和にした昔の戦争、そして、その時の犠牲者の方への恩返しになると思います。

「行ったからこそ分かった平和」 羽村市立羽村第一中学校 三年 前田 彩月

私は二泊三日、羽村一中の代表として、広島で学んできました。特に被爆者の話を聞いた後は、人生観が変わり、平和について考えることが増えました。

私が行った後考えた平和は、死を理解することは同時に平和も考えることだと思ったことです。

被爆者のお話して、平和についてどのように考えているのかを伺った所、多くの方が、「戦争をしないこと」と答えていました。その答えをきき、戦争したら、どんなことが起こるのか、私の従来の考えと被爆者のお話を比べてみました。私は広島に行く前、そんなに戦争について深く考えたことがなく、ただ、街が空襲で焼かれ、住む場所や食糧、人もなくなるからしてはいけない。という大まかな理解で戦争の悲惨さを収めていました。しかし、被爆者の話している表情を見ると、悲しそうに仲間について語っていたので、聞いて申し訳ないという気持ちと体験した人にしか分からない戦争が今も記憶にしっかり残るほど印象的だったんだなと思いました。私は祖父を亡くして大泣きしました。でも、大泣きできるのは、今の時代だから泣けるんだと思います。戦時中の時代は人が亡くなる度、大泣きはできないと思うし、「日本のために命を捧ぐ」という教えがたたきこまれたと思うので、誰かが死んでも国のために死んだから、日本は勝つ。というような感情になっている人が一部いたかもしれません。

今の時代と戦時中の時代を見比べると、今の時代はありのままの自分の喜怒哀楽を出せる時代になってきたと思います。「くだらない口ゲンカ」、「ジャンケンで勝ったちょっとした嬉しさ」、そして、「大切な人と一緒に過ごす一瞬一瞬」は、当たり前でなく、戦争で亡くなった方々、その遺族の方々でつくられた平和だということが身にしみるほど分かりました。そして私たち後輩は、祖先が大事に守ってきた目に見えない平和を大切に守り、私たちの子孫にも伝えていきたいと思いました。

羽村市立羽村第二中学校 三年 出水 夢

「戦争の中身まで知る」これは私が広島へ行く前にたてた目標です。“戦争”と考えても「激しくて悲惨なもの」というイメージで終わってしまい、肝心なところが分かりません。それを知りに行こうと思いました。

覚悟はしていましたが、その想像をはるかにこえ、とても衝撃を受けました。平和記念資料館では目を塞ぎたくなるような写真がたくさんありました。ひとつひとつの慰霊碑からも込められていた想いがずっしりと伝わってきました。そして一番辛かったのは、被爆体験者の方の話を聞いていた時です。家族のこと、友達のこと、死んだ友達の親に言われたことなどの辛い思い出を語っていただきました。その中で印象に残っているのは、原爆によって負った怪我を治療すると父に言われ、顔と腕の皮膚を全て剥がされたというものです。その話を聞くまで考えたこともありませんでした。なのでそれを想像したときは、思わず涙がこぼれました。目を背けたくても、このようなことがあったという事実を忘れてはいけないと思いました。

「平和はあなたたちが守っていくのよ」と、おっしゃっていました。戦争に関心を持ち続けることはもちろん、私が戦争について知ったことを忘れることはなく、ピースワークショップで深めたことを身の周りの人に伝えていき、世界に平和を発信できたらいいなと強く思いました。

羽村市立羽村第二中学校 三年 菅野 純那

私がこのピースメッセンジャーに参加した理由は、戦争で生き抜いた方々のお話を聞いたり、平和記念資料館を見てみたいと思ったからです。

私は、岡さんの話が一番印象に残りました。原爆が落ちる前の生活、原爆が落ちたとき、落ちた直後のようすなどを、岡さんが働いていた地下壕でお話をしてくれました。地下壕は暗くて、最初は少し怖かったです。岡さんが話してくれた中で、「三人の友達に会った時の話」と、「意識もうろうとした友達の話」が心に残っています。

まず、三人の友達の話は、「一人の子は、顔がパンパンにはれあがっていて誰だかわからない」「一人の子は、腕が焼けただれてだらんとして骨が見えている」「一人の子は、頭が後ろにかくんとなっている」。その状況を考えたとき、とても怖かったです。

後者の話は、「火傷をして意識もうろうとしている友達が、母の涙でゆっくり目を開けた」という話です。その話を聞いたとき、涙が出そうになりました。もし自分がそうなったら、母と別れたくないと思ったからです。

平和記念資料館では、火傷をした人の写真や、原子爆弾の模型などがありました。たくさんの資料がある中で、滋くんの弁当が一番心に残っています。開墾した畑から初めて収穫した作物のおかずで喜んでお弁当を持っていったのに、食べられずに亡くなってしまいました。発見されたときに、大切そうにお弁当箱をかかえていた、と書いてありました。それを見たとき、すごく食べたかったんだろうなと思い涙が出そうになりました。

岡さんの話や滋くんのお弁当箱などで、一つ分ったことがあります。“平和に過ごせた今日が、今日のような日がまた来るとは限らない”ということです。なので、日々を大切にしていきたいと思います。また、戦争を繰り返すことがないように、今回経験したことをたくさんの人に広めていきたいです。

「僕たちの手の中にあるもの」 羽村市立羽村第二中学校 三年 鈴木 虎太郎

戦争。それは、多くの人の自由を奪うもの。戦争。それは、二つとない大切なものを奪うもの。今も世界のどこかで戦争・紛争があり、何百人という人が亡くなっています。なぜ普通に生きている人までもが殺されなくてはならないのでしょうか。戦争・紛争はなくならないのでしょうか。

ぼくはピースメッセンジャーとして広島に行き、たくさんのものを見て聞いてきました。その中で、特に印象に残っているのが、当時、広島二中の2年生だった浅野さんからのお話です。

浅野さんは被爆体験後、記者になり、被爆された方々から話を聞いて回っていました。その中の一人の女性は「8月6日が近付くとボコンボコンという音が聞こえてくる。それは息子を探す中聞いた内臓が飛び出る音」と涙ながらに話していたそうです。内臓が飛び出る音、少しの間頭が真っ白になりました。想像もできない光景を頭の中で展開して。

また、当時中国軍管区司令部で働いていた岡さんの話で、「友達が全身火ぶくれ、目は潰れ、手はボロがかかったように皮がはげていた」というものもありました。これが人間か、本当に生きている人間なのか、そう疑ってしまうほどでした。岡さんは、その友達が助けられず後悔していました。その話を聞いたとき、ぼくはとても心が痛みました。なぜこんなに辛い思いをしなくてはならないのか。しかし、本当に苦しく、悲惨なのは体験談を話してくださる方々であると気づきました。

被爆体験をされた方の中には、話さない、話したくないという方も少なくないといえます。後から聞いた話ですが、僕たちが話を聞いた岡さんも、最初は話すつもりはなかったそう。それでも僕たちに、あの日広島で起きた事実を知らせようと、苦しみを乗り越えて話す事を選んだと知り、僕たちはそれに必死に向き合わなくてはならないと改めて感じました。

今、世界には数万個の原子爆弾があるとされています。それが日本に落とされないと保証はどこにもありません。世界をも破壊する準備は、今日も進んでいます。しかし、僕たちはこれを止めなければなりません。そのために今、僕たちに必要なことは、知識を得ることだと考えます。ピースメッセンジャーの活動で学んだこと、考えたこと、それを僕がどれだけ活かせるかはわかりません。ですが、自分の言葉でしっかりと伝えていこうと思います。

原爆が落とされた日も、雲ひとつない晴天。風もなく穏やかな日でした。あの時と同じ空の下、あの時とは違い、兵器という恐怖におびえることなく、子供たちが無邪気な笑顔で遊びまわっている。そんな日本を、世界を、地球を、これから僕たちが創っていきたいです。そして世界へ叫びたい。「戦争・紛争を無くせないはずはない。平和は僕たちの手の中にあるのだから」

羽村市立羽村第二中学校 三年 花谷 望絵

戦争は国同士の戦いですが、そもそも国は人です。それでも戦争は、人と国を直接結びつけてしまいがちで、そこが怖いと思います。

私は、岡さんの被爆者体験談の中で、投下数日後の話が印象に残っています。米軍がボロボロの広島を、飛行機から何枚もカメラに収めていたという話です。岡さんは「傷ついた人が下に大勢いるのに。鬼だと思った」と言っていました。米軍は写真の中の苦しむ人を、ボロボロの街を、すべて日本として括っていたのかもしれないと思いました。一枚一枚に写る苦しみに、意味を見出すことなどなかったろうと思いました。

岡さんは自身の被爆体験談を一度も外国人に語ることなく、全て断っているそうです。「やっぱり心のどこかで恨んでいるのかもしれない」というようなことも口にしていました。私は、70年は心を癒すのにも整理をつけるのにも短い時間だと思いました。

私はずっと岡さんの話が頭に残っていたので、私の班の活動は私にとって願ってもない好機でした。平和記念公園を訪れる外国人へのインタビューです。大勢の外国人に英語で戦争と平和についての考えを尋ねました。インタビューをした中に、印象に残っている人がいます。15歳と17歳のフランス人の兄妹です。彼らは英語があまり堪能ではないようで、ジェスチャーと片言英語でコミュニケーションをとりました。「平和のために私たちができることは？」の質問の答えをメモ帳に書いてもらうとき、大分長考していたので、「In French, OK」と私が言うと、「Thank you」と、ほっとしたようでした。メモ帳にはフランス語で「人を助ける。みんな仲良く」とありました。これだけのことが、国を介すだけでとても難しくなってしまうことが、とても残念です。別れ際に「めるしい」と言うと、「アリガトウ」と返してくれました。

ピースワークショップで、多くの班が「戦争の悲惨さを未来に伝える」と発表していましたが、私はここに世界を加えたいです。岡さんのように体験談を語れない人は他にもいらっしゃると思います。しかし、それぞれの体験が、人類の過ちを語る歴史で私はそれを世界の同世代の人と一緒に考えたいです。平和は日本だけでは実現しないから。

インタビューをした外国人は皆、私にとって、ただ何々人と分けるだけの人ではありませんでした。ここに考えると命がありました。私が私であるように、彼らも彼ら。命の重みは世界共通です。これを見失い、また戦争が起こることがないように、伝えていきたいです。

羽村市立羽村第三中学校 二年 三河 凜之介

私は今の人々がちゃんと平和について考えられていないと思います。なぜなら街頭調査で「8月15日は何の日ですか」という質問に対して、終戦記念日と答えることができない人が、多数いたという事があったからです。私はこうなった理由は、みんなが戦争についてちゃんと考えられていないからだと思います。それを解決するには、実際の体験を聞くということが良いと思います。それは実際の体験を聞いた方が心に残るからです。そして、そのような経験は一生に数回しか体験することができないので、人生の中での大事な思い出としても考えることができるからです。

このようにして戦争について考えることによって、この世界が平和になると思います。しかし私はこれまで体験談を聞いたりすることができませんでした。けれども私は夏休みに、青梅・羽村ピースメッセンジャーで広島に行くことができました。そして、広島で岡さんという方の体験談を聞きました。

その方は、広島で原爆にあった方で、原爆が落ちた時に、この方は、軍の司令室で各地の軍の司令部やNHKに警報を発令したり、発令したことを知らせる役割をしていました。私は、この方の体験談を聞いて、原爆が落ちた後に、広島がすぐに火の海になったのではなく、その前に広島が何もなくてシーンとしていたことがあったことに驚きました。そして、その方の体験談を聞いた後に、平和記念公園にある平和記念資料館に行きました。その資料館では、いろいろな展示物が置いてあって、原爆がいかに恐ろしい物かを再確認することができました。その後、平和記念公園で色々な石碑を見て、残った人が亡くなってしまった人に対してやることも考えることができました。

私は、このような体験をして、戦争がいかにいけないものかということを、再認識できました。また、その戦争を終わらせようとしてアメリカが使った原爆は、戦争を終わらせるためだからといって、ものすごい被害を出しました。このようなことがまた起きないようにするために、私は今の人々がちゃんと戦争について考えなくてはいけないと思いました。

羽村市立羽村第三中学校 三年 国枝 優生

私達ピースメッセンジャーは8月4日から8月6日までの3日間、広島に行ってきました。このたった3日間だけでも、とても学べ、そして、とても考えさせられました。

私がこの「青梅・羽村ピースメッセンジャー」に参加しようと思った理由は二つあります。一つは、去年、生徒会の先輩がこれに参加していて、行った後に、「たくさん学べた」と言っていたので、私も行って学びたいと思ったからです。もう一つは、これに応募する前、私の母と戦争や原爆のことなどについて話していて、すごく戦争に興味を持ったからです。私はこの「青梅・羽村ピースメッセンジャー」に参加できて本当に良かったと思います。母も「とても貴重な体験ができたね」と言っていました。

私は広島に行く前、事前学習で原爆のことを学んだり、レクイエム「碑」という曲を聞いたり、「シゲル君の弁当箱」という絵本を読んだりしました。広島に行くために、戦争を生で知るために、色々なことを知る覚悟はして行ったつもりでした。ですが、いざ生で見たり聞いたりすると耳は塞ぎたくなるし、目をつぶりたくなるようなものばかりでした。広島に行って一番印象に残ったものは、平和記念公園内にある「被爆したアオギリ」という木です。普通に見るとただの木なのに、ある人はこのアオギリを見ると、光るものが見えたり、人のうめき声が聞こえたり、重苦しい怨念を感じたりすると言っています。それに、子供がアオギリについていた傷跡に向かって話しかけたりしているのだそうです。この木には当時の魂が宿っているのだな、と思いました。他にもたくさんの慰霊碑があり、それぞれに色々な思いがありました。

私が平和のためにできることは、ピースメッセンジャーとして、絶対に忘れてはならない戦争を、伝え続けることです。そして、一人から二人、二人から三人と、どんどん広まってくれば、「戦争はだめ」、という思いが強まり、世界から戦争はなくなると思います。一人一人の言葉は微力でも集まれば世論を変え、世界は変わるはずです。

羽村市立羽村第三中学校 三年 斎藤 若奈

私は、この事業で「外国人へインタビューをする」というとても特殊なことをやらせてもらいました。

今回なぜ参加させていただいたのかというと、学校で配られたチラシの「戦後 70 年」という言葉にひかれたからです。

学校でも太平洋戦争について勉強しました。しかし、主に場所や日付だけでした。だから、もっと知りたいと強く思うようになりました。

初回の事前研修は緊張しましたが、今では 10 回も会っていない仲間とは思えないほど仲良く、毎回笑いの絶えない時間を過ごしてきました。だから私は、このメンバーで行けて本当に良かったと思っています。

そのためか、広島に行く前日は、なかなか眠れませんでした。

そして当日、みんな元気に東京を出発しました。

8 月 4 日、広島一日目、現地に着いてまず、原爆によって被爆した方の一人である、岡さんの被爆体験談を聞きました。その際、当時の中国地方の軍の司令部の地下通信室として使われていた地下壕に特別に入らせてもらいました。中は涼しくて、暗くて、天井が低かったです。「こんな所でお仕事をされていたのだな」と思いましたが、戦争というものを知らない 15 歳の私は、なかなか実感できませんでした。しかし、そんな私でも岡さんの話を聞き、想像するだけで鳥肌がたち、とても怖いものなのだと理解できました。

そしてその夜、班ごとに行われたミーティングで「平和記念公園に外国人がたくさんいたのが気になった」という一言から、私達の班は、外国人へインタビューすることになったのです。

質問は三つです。「なぜ広島に来たのか」、「原爆を使ったことについてどう思うか」、「平和のために私たちは何ができるか」です。

インタビューをしていて、私が一番印象に残ったのは「原爆を使ったことに対して」の質問に賛成の人がいたことです。その方はアメリカ人でした。私はとても驚きました。しかしそれと同時に、その様に考える方もいるのだと思いました。国や文化が違ければ、もちろん考え方も違うのです。だから、それを否定するのではなく、理解し合うことこそ平和への第一歩だと私は思います。

今回ピースメッセンジャーとして広島へ行き、たくさんの思いや考えに触れることができたこと。戦後 70 年が経ち、お話を聞く機会が減っていくなか、貴重な体験ができたこと。広島での三日間で得たものを、今度は私たちが日本で起こった「戦争」というものが風化することなどないように、後世へ伝えていきたいです。

「平和への願い」 羽村市立羽村第三中学校 三年 佐藤 千沙奈

日本が戦争をしなくなって70年という月日が流れた今、広島に行って考えたことがあります。それは“人それぞれの平和の考え方”です。無論、脳や偏差値が人それぞれで主張も変わるのとは分かっているのですが、“平和”というと、「戦争をしない」という考えが一般的なのですが、私たちが普段ケンカをしたり言い争いなどがなくなると、平和ではない、という人も居ました。だから、私は平和というものの実態は一つではなく、たくさんの思いがつながり形成されるものと考えました。

しかし、最近では“平和、平和”と言いつつも、平和を築き上げるために日本がどのような事をしたのかというのを知ろうとする人達が減ってきています。今の戦争のない、空襲におびやかされない時代に慣れすぎてしまって、戦争の恐ろしさを考える人がいないのです。いわゆる“平和ボケ”というものです。教えてくれる場所や人はいるのに見向きもしないのです。私自身もその一人かもしれません。これが私達の課題であると考えます。一つは、今の時代に慣れすぎないこと。二つ目は、戦争があった時代を学ぶこと。三つ目は、戦争の恐ろしさを伝えていくこと。だと私は思います。いや、人としての常識だと思えます。今、広島で戦争の体験談をしていらっしゃる方々は、世間で言う、かなり上の高齢者です。20年後、30年後は、その口で話をしてくださることができなくなってしまうのです。すると、戦争を伝えていくのは次の世代、つまり「私達」です。それなのに、戦争を知らないと伝えられません。今の大人の人たちが頑張ってつないだタスキを私達が壊してしまうことになりかねません。だからこそ、戦争を知らないということは、それほどの罪になると思うのです。

今、私達が立っているのはあの70年間があるからです。私は、戦争を知り、自分のためではなく、誰かのために行動すること。これこそが平和につながると思います。「一人は皆のために、皆は一人のために」

おわりに

「青梅・羽村ピースメッセンジャー2015『中学生広島派遣事業 レポート』」を最後まで読んでいただきまして、ありがとうございました。

青梅・羽村子ども体験塾では、“新しい友達との出会いと平和の大切さを心で感じる旅”をテーマに、青梅市と羽村市の中学生を広島市へ派遣しました。広島市では、広島市の中学生、原爆を経験した方、外国人など、大勢の方と交流し対話を重ねました。帰ってからは、青梅市と羽村市の市民の方とも対話を重ねました。

みんな初めはよそよそしくても、対話することにより、性別、年代、地域、国籍を越えて友達になる事ができ、“平和”は、対話により実現できることを全員が実感しました。

このレポートを読んでいただいたあなたも、平和をつなげるピースメッセンジャーです。

相手の事を考えて対話することで、小さな“平和”をたくさん作っていき、次世代が“幸せ”と感じる平和な世の中をつなげていきませんか。

最後になりますが、広島二中 23 期生の皆様と交流する出会いときっかけを作っていただきました新出稔雄さん、塚本昭さんに感謝申し上げます。

青梅・羽村ピースメッセンジャー 2015

中学生広島派遣事業 レポート

～新しい友達との出会いと平和の大切さを心で感じる旅～

発行日 平成 28 年 1 月
発行 青梅・羽村子ども体験塾
編集 青梅・羽村子ども体験塾実行委員会
事務局 羽村市企画総務部企画政策課内

〒205-8601

東京都羽村市緑ヶ丘 5 - 2 - 1

042-555-1111 (代表)

s101000@city.hamura.tokyo.jp